

36

ロマン・ロラン国際平和シンポジウム 2008 記念号





ヴェズレーの入口広場から望む聖マドレーヌ大聖堂への参道に掲げられた横断幕

表紙写真:ヴェズレーの聖マドレーヌ大聖堂の演奏

神谷郁代のベートーヴェン演奏

撮影:園部逸夫

						ロマン・ロラン国際平和シンポジウム 二〇〇八 報告	新理事長ごあいさつ(ロマン・ロラン研究所と私	『最後の扉の敷居で』から 8	ロマン・ロランを「あたま」でなく「からだ」でよみ、きく	中国におけるロランの紹介者・傅雷
清	永	山	石	中	西	宮	西	村	尾	榎
原	田	下	Ш	田	尾	本	成	上	埜	本
章	和	雅	楢	裕	順	ヱイ子	勝	光	善	泰
夫	子	子	_	子	子	子	好	彦	司	子
i	:	:		i	:	i	:	彦		子 :: 1
95	92	90	89	87	83	71	68	46	26	1

新役員名簿	ロマン・ロラン研究所の活動	加藤周一さんを偲ぶ	ヴェズレー旅情 幸せな時間 :
		奥	園 神
		村	部 谷
		_	逸 郁
	:	彦	夫 代
		i i 102	i i 100 98
112 111 110	105	102	100 98

あとがき …………………………………………… 小

尾

俊

人 … 113

中国におけるロランの紹介者・傅雷

榎 本 泰 子

はじめに

思想の広がりや展開を考える上で、興味深い問題です。 ロマン・ロランの作品は、日本以外のアジアの国でどのように受け入れられたのか。これは東洋におけるロランの

が、抗日戦争(日中戦争)という特殊な時代背景の中で、ロランの思想や作品に対する生々しい思いを披瀝していま 後に、中国でどのような追悼記事・追悼活動が見られたかを調査・分析したものです。当時有名・無名の中国人たち (『ユニテ』三十二号「ロマン・ロラン没後六○年記念号」二○○五年四月所収)は、一九四四年末のロランの逝去前 内田知行氏の論文「抗日中国における中仏文化交流:中国の知識人はロマン・ロランをどのように評価したか」

すが、彼らはそもそもどのようにしてロランを知ったのでしょうか。

の翻訳を通じてロランを知りました。傅雷は一九二八年にフランスに留学し、パリ大学で文学を、ルーブル美術史学 ン作品を次々に翻訳・出版しました。その出版年度を示すと以下のようになります。 校で美術史を学んだ人物です。留学中に『ベートーヴェンの生涯』を読んで感銘を受け、三一年に帰国した後はロラ フランス語の原文が読めた人々を別として、中国の読者のほとんどは、傅雷(フー・レイ、一九○八~一九六六)

一九三四年 『ベートーヴェンの生涯』の要約を雑誌に発表

一九三五年 『ミケランジェロの生涯』『トルストイの生涯』出

版

一九三七年 『ジャン・クリストフ』第一巻出版

一九四一年 『ジャン・クリストフ』第二、三、四巻出版

一九四六年 『ベートーヴェンの生涯』(全訳)出版

『ジャン・クリストフ』再度の翻訳出版

(〜五三年

九五二年

戦争のさなかでした。当時交通が不便であるにもかかわらず、上海から桂林、重慶など内陸の都市まで流布し、 『ジャン・クリストフ』第一巻が刊行されたのは日中戦争開戦の直前であり、続く二、三、 四巻が刊行されたのは

や知識人の熱狂的な歓迎を受けました。「当時の青年読者の中で、『ジャン・クリストフ』のひとそろいを持っている

宝物のように見なし、先を争って回し読みした」ほどだったといいます。

トーとした傅雷の面目躍如たるものがあります。推敲に推敲を重ねて完成させた初版になお飽きたらず、一九五〇年 傅雷訳の 『ジャン・クリストフ』は名文の誉れ高く、「原作者が中国語で書いているかのように訳す」ことをモッ 者があれば、

ます。 代に再び一から訳し直して出版したというのですから、 傅雷のこの作品に対する思い入れが格別であることがわかり

品の普及に決定的な役割を果たしました。もしこの時期に傅雷が翻訳しなければ、これらの作品はあと数十年以上も に始まる文化大革命によって大きな打撃を受け、西洋文学の研究・紹介も滞ってしまったからです。傅雷自身、 傅雷が一 中国では知られなかった可能性があります。 九五〇年代前半までに、 ロランの作品をこれだけまとめて翻訳・出版したことは、 なぜなら中国の文芸界は一九五七年の反右派闘争、 中国におけるロラン作 そして六六年

的な仕事をしたがゆえに、文化大革命で迫害され、

自ら命を絶つことになりました。

— 3 —

生誕百周年に当たることから、 樹花舎、 私はこれまでに傅雷の書簡集『傅雷家書』の抄訳(『君よ弦外の音を聴け 二〇〇四年) を手がけたほか、 今日の中国で傅雷がどのように評価されているのかを含めて、 傅雷についていくつかの論文を発表しています。今年 (二○○八年) ピアニストの息子に宛てた父の手紙』 お話してみたいと思い は傅雷

一、「英雄精神」への共鳴

ます。

にこもって翻訳の仕事に専念するようになりました。作家ではなく「翻訳家」として名を成したのは、近代以降の中 科学校で教鞭を執りましたが、 傅雷は留学中西洋美術に強い関心を持ち、一時は美術評論家を目指していました。留学から帰ったあと上海美術専 生来頑固潔癖な性格で、 周囲の人間と折り合うことができませんでした。そこで自宅

国では数少ない例です。

たことがわかります。

や精力の傾注の度合いから見ると、 傅雷が翻訳したフランス文学は、 青年期・壮年期前半はロラン中心、壮年期後半から晩年はバルザック中心であっ ロランの他にはモロワ、メリメ、ヴォルテール、バ ルザックがあります。 作品数

が、 しく述べられています。 は内田知行氏の「抗日中国における中仏文化交流」に付された戈宝権「傅雷とロマン・ロランの通信につい 『トルストイの生涯』 傅雷が青年時代、 九三四年に二度にわたってロランに手紙を送っていることも注目されます。傅雷とロランのやりとりについて () かにロランに傾倒したかは、『ベートーヴェンの生涯』 中国語版の前書きとしたもの その中で、 **傅雷の最初の手紙に与えたロランの返書が紹介されています。傅雷が中** (を内田氏が日本語に訳出したもの)ですが、 ここでは日本語 の「訳者の前書き」などに明らかです て」に詳

英雄精神もよみがえりました。 ……私たちはいま英雄精神の炎がはげしく揺れてふたたび燃え上がった時期にいます。そしてその炎とともに しかしその炎は時には荒々しい火災を起こすこともあります。それに「英雄」を

正確に定義づけることも必要です。

ために偉大であるばかりでは足りません。人類共同体への奉仕のためにも偉大でなければなりません。最も偉大 すべての国民にとっての試練と闘いとの時であるこのわれわれの時代においては、みずからの自負と栄光との

な指導者は自国民の最も偉大な奉仕者、人類への奉仕者であるのです。 孫逸仙もレーニンもガンジーもそうでした。また行動でなくて思想や芸術でその天才を働かせた人びとのうち、

ベートーヴェンやトルストイがそうでした。

のです。 行動においても芸術においてもよみがえらせなければならないのは、その高い社会的感覚、 その深い人間性な

ンの返書は「人類への奉仕」の道を「行動」と「芸術」に二分している点で特徴的です。傅雷は翻訳を生業とし、 の満州事変以降、 「芸術」の道を選んだ人間ですが、それが政治的な「行動」と理念や目的を同じくすることをロランに教えられ、大 傅雷はガンジーの無抵抗主義に関心を持っており、ロランへの手紙でもそのことに言及していました。一九三一年 日本との関係が悪化する中で、国難をいかに乗り切るかは知識人にとって大きな課題でした。 ロラ

潔癖な性格と高い理想のゆえに、社会に居場所を見つけられなかった青年時代の傅雷は、 ロランとの精神的な紐帯

いに励まされたのではないでしょうか。

にわか をよりどころに翻訳の仕事を続けていきました。そして偶然にも、 に現実のものと考えられるようになったのです。 音楽の才能を持つ息子に恵まれたために、 理想が

たという面があります。 実は翻訳家としての傅雷の名は、 『傅雷家書』は、 生前よりも死後、 海外留学した長男・傅聡に宛てて書かれた手紙を、 それも『傅雷家書』(一九八一年初版) 次男 の出版によって高 7•傅 一般が整 理

編

集して公刊したものです。

が 年は、 ピアノを習わせたところめきめきと上達し、一九五四年には選ばれてポーランドに派遣され、翌年開かれた第五回ショ よれば、 しかも「ポーランド人にしか理解できない」とされていたマズルカの最も優れた演奏者として認められたのです。 パンコンクールで第三位入賞、マズルカ賞受賞という快挙を成し遂げました。東洋人の入賞はコンクール史上初めて、 はじめにあげた出版年表と比べてみると、ロランと文通し、最初に『ベートーヴェンの生涯』を発表した一九三四 正に傅聡が生まれた年でした。それから傅聡の幼年期、 (フー・ツォン、一九三四~) 当時の傅家は『ジャン・クリストフ』熱に覆われていたようです。例えば『傅雷家書』には、 ン・クリストフ』の翻訳出版に全力を傾けた時期にそのまま重なります。傅雷の書いたものや傅聡の回想に は幼い頃から傅雷の聴く西洋音楽のレコードに強い興味を示しました。 続いてピアニストとして成長していく少年期は、 次のような一 試しに 傅雷

もクリストフのつもりになっていたと言います。 象徴のように思えるのです。 ライン、ごうごうと高まる水音……鐘が鳴る、 天おじさん 〔傅雷の妻・朱梅馥の兄、 実際君の個性はロマン・ロランの理想と似たところがあります。 空は既に明るい…… 朱人秀のこと〕 〔『ジャン・クリストフ』冒 は、 君が 沁かさい 頃

節があります

(引用文中 (

内は訳注)。

音楽院の院長先生は君の演奏が流れる水、

まるで河のようだと言いました。それでますます私には

伝統に持つ民族は、牛斗〔牽牛星と北斗星〕をも呑む気概で表現してしかるべきです。 無辺の落木蕭々として下り、不尽の長江滾々として来たる〔杜甫「登高」の一節〕。……このような詩人の魂を 響きわたって一人ひとりの心に届きますように! すから! て、君とともに無限の音の海にそそぐでしょう! 菌 ……君見ずや、黄河の水天上より来たり、 『は正に「復活」の曙を迎えましたが、どうか君が中国の 世界に名高い揚子江と黄河は、 滔々と絶え間なく流れる水は人々の胸に流れ込み、 奔流海に到って復た回らず 〔李白「将進酒 ――新しい中国の ライン河より勢いが強いので ――鐘の音になり、 一の一節〕。 皆をつれ 世界に

根底には、 ものだったのです。 らは国語を担当したのですが、その教材は中国の膨大な古典文学作品の中から、名文を抜き書きして自分で編集した する街に出るのを嫌って学校に行かせず、自宅で勉強させました。家庭教師を頼んで英語と算数を教えてもらい、 の影響を最も強くうかがわせる手紙です。傅雷の、息子にかける期待があふれ出したような文章です。 傅聡がちょうど学齢期に達した頃、一家が住む上海租界は日本軍に占領されていました。傅雷は息子が軍人の闊 「傅雷家書」には傅雷と妻の朱梅馥の手紙あわせて二百通が収録されていますが、その中で『ジャン・クリストフ』 このような東洋的な学問がありましたが、 傅雷自身も、幼少期は家庭教師について伝統的な四書五経の学問から始めました。 はたしてその素地の上に、 ロランの思想がどのように接ぎ木さ 傅雷の思想の 自

るように勧めているのです。そのピアニストは君と同じ気質を持っているのでしょう、 か変わったことがあるとすぐ眠れなくなります。 ・ロシアのピアニスト 〔リヒテルを指す〕 のために興奮して一 神経過敏な血筋は同じですね。 晩中寝られなかったそうですね。 だからいつもできるだけ節制す ある話は君の極端なとこ 私たちも何

れていったのでしょうか。

に

そこで君自身は泰山のようにどっしりして、百万の大軍を率いる将軍のように顔色ひとつ変えなかったなら、そ 芸術の修業をするためには、heart〔感情〕 れこそ君の最大の成功であり、芸術と人生の最高の境地に達したことになるのです。ベートーヴェンのエピソー し君が聴衆の感情をかきたてることができ、彼らが酔ったように我を忘れて、泣いたり笑ったりしたとします。 の理想や仏教の理想は、感情を支配できるようにすることであって、感情に支配されることではありません。 い」ことは、芸術にとって必ずしも理想的なことではありません。それどころか、 が余り過ぎる人は、できるだけ自制することが必要です。 時には大きな欠点になります。 中国哲学

ンの生 |涯』を読んで、 ·国哲学の理想や仏教の理想」が、ロランの描いた芸術家の像に結びつけられています。 苦難に打ち勝つ意志の力や、苦難を芸術に昇華する力に強く共感しました。 傅雷は 『ベートーヴ また、

単にできることではありません。

マン・ロランが心に描いた大芸術家も、このような人々なのです。

高い人間性が必要であり、 の伝統的な礼楽思想に通じる部分があります。 な位置づけを与えているのが特徴です。 **博雷の思想の根底にこうした音楽観があったからこそ、** 芸術によって人類に奉仕することが大切であると学びました。このような芸術観は、 つまり、音楽は人心を調和させ、社会を安定させるものだという考え方で 礼楽思想では音楽を単なる娯楽ととらえるのではなく、 理 性的 中国

ロランの芸術観が自然に受け入れられたのではないでしょ

す。

ドを覚えているでしょう。ある時彼はピアノを弾き終わって、聴衆がみな涙を流しているのを見ると、大笑いし

て言いました。「ふん、みんな馬鹿者だ!」芸術は火であって、芸術家は泣かないものです。これはもちろん簡

特に君にとっては。しかしこの境地を一生の努力目標にしなければなりません。

二、東西文化の融合

す。 それが技術の後れとして大きなコンプレックスになっていたことは、『傅雷家書』の中からもうかがうことができま 独習を余儀なくされた時期が長く、傅聡はポーランドに留学するまで体系的な教育を受けたことはありませんでした。 揮者で、優れたピアニストでもあったイタリア人、マリオ・パーチに師事しました。その後は戦争や革命の影響で、 立からです。その後五十年足らずのうちに、世界に通用するピアニストが育ったのですから驚くべきでしょう。 与えました。中国で西洋音楽の専門教育が始まったのは一九二七年の国立音楽院 さまざまな国籍の人々が暮らし、市民の税金で運営されるオーケストラもありました。傅聡はそのオーケストラの指 傅聡がショパンコンクールで入賞したことは、中国国内で大きな話題になっただけでなく、世界の音楽界に衝撃を ただし傅聡自身は国立音楽院で学んではいません。一九二○年代~三○年代の上海は、共同租界・フランス租界に (現在の上海音楽学院の前身) の設

績を得られたのかについて分析しました。 ショパンコンクールのあと、傅雷は「傅聡の父」として注目を浴び、 マスコミの求めに応じて、 なぜ傅聡が良い成

のような得難い、 ……イタリアの審査員でピアニストのアゴスティー 生まれながらの才能を与えることができるのです。ショパンの境地は中国芸術の境地と似てい ノ教授は傅聡にこう言った。「古い文明だけがあなたにこ

の自負や、 の古典文学を教えた父親として、その方針が間違っていなかったことを再確認しているようです。中国人であること トフ』から多くの啓示を受けました。『ジャン・クリストフ』の「訳者の前書き」に傅雷はこのように書いています。 二つの異なる文化が、互いにどのように影響を与え合うことができるかについて、傅雷はやはり『ジャン・クリス 最後のくだりからは、 西洋音楽にどのように向き合ったらいいのかは、傅雷にとって大きな問題だったのです。 祖国の文化に対する愛は、 中国伝統文化に対する傅雷の強い自信をうかがうことができます。 傅雷にとってとりわけ重要でした。だからこそ、傅聡が東洋人のピアニストと 息子が幼い · 頃 自ら中国

天的な強者、 力をもってフランスの衰微を救い、フランスの自由をもってドイツの従順さを救うことである。 ラマン族の素朴な精神を持ち、ベートーヴェンのような英雄的意志を備え、その後ラインの向こう岸で、 「の再生は、二つの主要な民族の文化交流から始まる。 すなわち力の代表とした (彼の姓クラフトはドイツ語で力の意味である)。彼は生まれつき古代フ だからロマン・ロランは主人公をドイツ人にし、 西洋文化の二度 彼を先

……このドイツ・フランス両民族の比較と分析の裏には、一つの偉大な提案が隠されている。

それはドイツの

過ぎるが、両者を融合したところに理想的な新しい文明が生まれることが可能になる。 自由なフランス文化の洗礼を受けたのである。ラテン文化は古くなり過ぎ、ゲルマン文化は荒々し クリストフという新人は、

新しい人類の代表だ。

傅雷は傅聡という具体的存在を通じて、東洋対西洋の問題としてとらえました。傅雷にとっては傅聡こそが、 二つの文化の交流・融合という課題は、 ロランにおいてはフランスとドイツの関係の中で論じられていましたが、

化の融合という壮大な理想を実現できる「新人」でした。 イギリスを代表する日刊紙『ガーディアン』の前身〕に J.H. Elliot〔エリオット〕という署名で書かれていた 滅多にいなくて、ほとんどは平々凡々な「職業評論家」に過ぎません。しかし送ってくれた批評の中でいくつか でいるのではなく、先人の持たなかった清新な視点を持っていると言っています。また君が西洋の伝統を離れた |道理に合わない」、「でたらめな」、奇を衒ったものを感じないだろうとも。君の特徴を実によく理解しています 《東方からの新たな啓示》New Light from the Eastでは、君のことを、西洋音楽の伝統をそのまま受け継 .確かに当たっていました。例えば五月七日の Manchester Guardian〔マンチェスター・ガーディアン。 東洋人の思想感情で西洋音楽を表現することができ、なおかつ西洋の最も保守的な人に受け入れられるとい 常によりよいものでそれに替えていると。たとえ西洋文化の最も保守的な擁護者であっても、そこに何ら 君は以前、 君が確かに西洋音楽に新しい貢献をしたことを意味しています。私はとても嬉しく思いました。これ イギリスの評論家に対してずいぶん厳しかったですね。良い評論家は良い演奏家と同じように 現在

もまた東風が西風を圧倒する〔東西両陣営の対立の中、社会主義陣営が優位に立っていることを表すのに使われ

芸術の完全さを損なわないという条件のもとで、新しい血を注ぎ込むことができます。 家が世界の文化に対して果たさなければならない責任であることはさておき、 た言葉。毛沢東が一九五七年十一月のモスクワにおける講話で使い始めた〕ことの表れであり、正に中国 異なる種族の芸術家だけが、 世界の文化はこうしてこ |の芸術

手塩にかけた息子が 「世界の文化」に対して貢献できるということは、 傅雷にとっては何にも代え難い喜びでした。

そますます豊かに、

ますます完璧な、

輝かしいものとなるのです。この道をこれからも進んで行ってください!

しかしこの手紙が書かれた時、 傅聡はすでに傅雷から遠く隔たった場所にいたのです。

た時、 界や音楽界の現状についての率直な意見表明があだとなったのです。その後「右派分子」のレッテルがはずされるま で、傅雷は翻訳作品を実名で発表することはできませんでした。国内の状況を知った傅聡は、ポーランド留学が終わっ 九五七年に始まった反右派闘争で傅雷は「右派分子」とされ、政治的・社会的な批判の対象となりました。 祖国に帰ることなく、イギリス亡命の道を選びました。その後二十年間、傅聡は祖国の土を踏むことはできず、

両親の死に目にもあえなかったのです。

三、晩年の思想と後代への影響

傅雷は晩年、

祝福しました。しかしその一方で、異国に生活の基盤を置き、 聡はイギリスで世界的ヴァイオリニスト、 またメニューインの娘と結婚し、子供にも恵まれました。 メニューインの知遇を得て、 ついにはイギリス国籍まで取得した息子は、次第に遠 祖国の両親は、 演奏活動も順調に続けていくことができまし 傅聡が一家の長となったことを心から

交際を絶ってひたすらバルザックの翻訳に打ち込み、息子との文通だけを楽しみに過ごしました。傅

い存在になっていきました。

ヴ の作品を分析して、人間の「意志」の闘いが そのような現実を反映しているのか、 悟った」と結論づけています。 傅雷の思想には晩年になってある変化が見られます。 「無益であり、 運命や神と和解し、妥協する方がよいことを(ベート 例えばベー

また興味深いことに、ロランに対しても以下のように書いています。ウェンが=引用者注)悟った」と結論づけています。

抽象的な漫画とは全く違います。 とりの人物が生きているように目に浮かびます。 ……バルザックはさすがにリアリズムの巨匠だけあって、彼の描くものにはちゃんと暖かい血が流れ、一人ひ それはロマン・ロランのような、 イデオロギーだけのほとんど

がかつてロランに送った手紙には、 東西両文化の融合を夢見た傅雷でしたが、不遇な晩年になって思いは薄れたのでしょうか。 ているのか、 いずれにしても辛辣な表現です。他の手紙にはロランに対する言及は一切ないため、一体どのような真意がこめられ は中国語の原文でも「漫画」であり、ここでは新聞等に掲載される風刺漫画の類を指すかと思われますが、 判断が難しいところです。青年期から壮年期にかけて、あれほどロランの思想に共鳴し、息子を通じて 自らの晩年を暗示するようなくだりがありました。 振り返ってみると、傅雷

しかにきわめて少しでした。いたずらに時を過ごし、難を受けて生を終えるならば、道徳信念もこのために動揺 もるばかりです。 私は国家と社会環境によって圧迫されており、 私たちの努力がまったく無駄だったというわけではないにしても、 反抗を実行する力も勇気もなく、 得ることのできたものはた ただ精神の

。「右派分子」とされただけでなく、「裏切り者」の亡命者を育てた父とされた傅雷は、 :頼する友人たちに裏切られ、 批判のやり玉に挙げられた傅雷は、「道徳信念」の揺らぎを感じていたのでしょう もはや運命との闘いを諦

てしまったのでしょうか。

せられ、それをすすぐこともできずに日々を過ごすことは、牢獄に入るより辛い」と。潔癖な傅雷らしい最期でした。 そして朱梅馥にとっても、家事から原稿の清書まで、生涯夫を支え続けた妻らしい最期でした。 拗な家宅捜索を受け、「反党の証拠」が見つかったとされたのです。 九六六年九月三日未明、傅雷は妻の朱梅馥と共に首を吊って自殺しました。文化大革命の発動直後、 傅雷の遺書にはこうありました。「無実の罪を着 紅 衛兵の執

芸術は総じてブルジョア(資産階級)の産物とされ、『ジャン・クリストフ』も「ブルジョア個人主義」「ブルジョ 人道主義」の作品であるとして批判されました。若者は学校を離れて農村での労働を強いられ、 文化大革命期の中国では、毛沢東の神格化が進み、文学・芸術も毛沢東を礼賛する道具になりました。 世界の文学を味わう 西欧の文学・ ア

―― 最近になって私たちは知るのですが ―― 傅雷の翻訳作品は決して忘れられたわけではありませんでし どころの時代ではなくなりました。

働している間 入った文章を皮のチョッキの裏に写し取り、暗記するまでおぼえては恋する村娘に語って聞かせます。 読むことが禁じられたロランやバルザックの作品を、 がフランス語で書いた自伝的小説『バルザックと小さな中国のお針子』によれば、主人公は四川省の山奥で労 仲 間が隠し持っていた外国の小説を盗み出し、 隠れて読んでいた人々がいたのです。 日々読みふけります。 読むだけでは飽きたらず、 ダイ・ いくつかの作 シージエ

品の中でも、『ジャン・クリストフ』は主人公に特に大きな影響を与えました。

変わった。作者の誇張は行きすぎることもあるが、それで作品の美しさが損なわれることはなかった。 教育と再教育を受けた僕のお寒い頭からすっかり抜け落ちていたことだったのだ。遊びのつきあいは大恋愛へと ただろう。一人の人間が世界を相手に戦いを挑む、そんなことは、いい意味で期待を裏切られたこの出会いまで、 ような啓示をもたらした。この本がなかったら僕は、個人主義というものの輝きも偉大さもついぞ理解できなかっ 『ジャン・クリストフ』は、卑小さのかけらすらないその断固たる個人主義でもって、僕に心の糧となる 数百頁の

大河、

んなすてきな人生も、どんなすてきな世界も前とは同じではなくなる、そんな本だ。(『ヨ)

その力強い流れに僕は文字どおり飲みこまれた。それはまさに理想の本だった。

読みおえたときには、ど

な個性が、正に既成の価値観を破壊するものとして読者の前に現れたのです。その衝撃がいかに大きかったかが、こ のくだりからはよく伝わってきます。 うままにはならない、 文化大革命という特異な時期においては、 いや思うままにしてはならないのが現実でした。そんな時代にジャン・クリストフという強烈 個人よりも集団の利益が優先され、進路の選択や恋愛すらも、 個人の思

傅雷の息子、傅聡ものちに作品の意義をこのように語っています。

していますが、 した。この本は基本的にベートーヴェンのことを書いていて、多くのことがらはベートーヴェンの一生を背景と てというだけでなく、おそらくは中国の知識人に最も大きな影響を与えた外国文学だと思います。 『ジャン・クリストフ』 この本は出版されてから、中国に最も必要とされている一つの理想主義の精神を象徴するようになりま 一種の象徴的な意味を持っています。もちろんベートーヴェンだけでなく、中にはマーラーや、 は父が翻訳した本で、 私は小さい頃から読んでいました。 実はこの本は私にとっ 私の知るとこ

きな理由だと私は思います。これは中国人が最も必要としている本なのです。(エヨ) えているのは個性の解放ということです。この本が中国でこんなに大きな影響力を持ち得たのは、 ワーグナーや、 その他の音楽家も出てきます。ロマン・ロランは偉大なヒューマニストであり、この本で主に訴 それが

るのが て教えるなど、 両親の追悼会に参加するため二十年ぶりに帰国しました。その後北京の中央音楽学院や上海音楽学院で客員教授とし した鄧小平政権を厳しく批判し、訪中も一時途絶えました。そのことと考え合わせると、 ストフのつもりになっていた」少年が、見事に年輪を重ねたことを感じさせます。傅聡は文革終了後の一九七八年、 傅聡は翻訳者の息子としての立場を超え、中国人全体にとっての作品の意義・価値を論じています。 個性の解放」であるとする傅聡の言葉は、 祖国の音楽教育に力を尽くしています。しかし一九八九年の天安門事件の際は、学生・知識人を弾圧 私たちの胸に重く響きます。 中国に最も必要とされてい かつて「クリ

おわりに

オーストラリア、フランス、ドイツ、ベルギー、そして日本から、研究者、 ポジウム」が開かれました。 まりました。 一〇〇八年五月一六日と一七日の二日間、 の著者である森岡葉氏が参加し、研究発表を行いました。 日本からは私と、『望郷のマズルカ 参加者名簿には一九〇人余りが名を連ね、中国大陸のほかに香港、 中国・南京大学で「傅雷生誕百周年記念および「傅雷と翻訳」 激動の中国現代史を生きたピアニスト 作家、 編集者、 フー・ツォン』(ショパン、 ジャーナリストなどが集 台湾、シンガポール、 国際シン

シンポジウムのタイトルに表れているように、今回は「翻訳」が一つの大きなテーマになっていました。

主催者の

それは傅雷である。 翻訳を志す全ての者にとって、 傅雷は精神の教師である、と」。

雷訳の はないかという私の心配も無用だったようで、定訳として高い評価を得ていることがわかりました。 ロランやバルザックも色とりどりに版を重ねています。 開放政策が進んだ今日、かつて「禁書」とされた西欧の文学作品が大量に書店の店頭に並ぶようになり、 傅雷の文体が今日の読者の目には古めかしく映るので 傅

と述べました。「傅雷精神」はシンポジウム全体を通じて多くの人が口にしていましたが、それが何を意味するのか 江蘇省作家協会の指導者たちは、 シンポジウムは折しも四川大地震の発生からわずか数日という時期に開かれ、 マスコミのカメラの前で口々に「今こそ傅雷精神に学んでこの難局を乗り切ろう」 開会式でスピーチをした南京大学や

いずれにしても傅雷の業績は、単に優れた翻訳作品を残したというだけでなく、その「精神性」から語られること

は判然とせず、おそらく使う人によって解釈も異なるようでした。

が多いようです。 ような高い学識と理想、 それは推敲に推敲を重ねて完璧を目指したという翻訳上の態度のみならず、 祖国の伝統文化の尊重や、息子への無私の愛などを含んでいます。 『傅雷家書』に表れた

な 理 殊な時代背景を反映したものであるが、 私は たのは残念です。 「『傅雷家書』の日本における翻訳出版の意義」と題する発表を中国語で行いました。『傅雷家書』 と述べました。『傅雷家書』 同じ作品が、 中国 親子の情や文学・芸術への愛など、 はほかに韓国語版が出ているそうですが、 日 本• 韓国でそれぞれどのように受け止められているかを比べることが 普遍的な価値観によって日本の読者にも 韓国 語 0) 翻 訳者 「が参加してい は 中 玉 の 特

もっと意義深かったでしょう。

ため、 開 てだったので格別の思いがありました。 ました。 かれたリサイタルや、 六日夜には、南京芸術学院音楽ホールにおいて、傅聡による記念リサイタルが開かれました。 傅聡の機嫌は悪く、 ひとたび座りかけた傅聡は、何を思ったかもう一度立ち上がってこう言ったのです。「写真を撮らないで。…… 「別府アルゲリッチ音楽祭」でのリサイタルを何回か聴いていますが、 曲の合間に立ち上がって「これ以上撮ったらもう弾かないぞ!」と叫ぶハプニングがあり あいにく一部の聴衆が演奏中ひっきりなしにカメラのフラッシュを光らせた 中 私はかつて東京で 国で聴くのは初め

よ」という傅聡の言葉の方が胸に残りました。 ソナタなどで、いずれも父・傅雷との思い出の曲でした。しかしハプニングに心を乱された私には、「音楽を尊重 その日のプログラムはモーツァルトのファンタジー、ハイドンのソナタ、ショパンのノクターン、 シューベルトの

私たちは音楽を尊重しなければなりません」。

いて紹介しましょう。 傅雷は息子への手紙の中でこんなふうに書いています。

傅雷の精神の本質としていつもあげる言葉が「赤子の心」です。

傅聡が父親について語る時、

……赤子の心 〔生まれたままの汚れない心〕という言葉は、私もずっと覚えています。 赤子こそは孤独を知り

合うことができるのです。君の友達が言ったとおりです。芸術に胸を揺さぶられるのは、 赤子の心を持ち続けていれば、 ません。 赤子は孤独になっても、 澄んだ鏡のように純粋でなければ、 年を取っても後れを取ることはなく、この世の全ての赤子の心と触れ合い、 一つの世界を作ることができ、魂の友をたくさん作ることができます。 どうして先人の魂を理解することができるでしょう? きっと魂が純粋だから 永遠に

て聴衆の魂を打つことができるでしょう?……

最後にこの言葉につ

れた文章で中国の人々に伝えることができました。 「赤子の心」を持ち続けたことによって、 傅雷は激動する中国社会の中でふさわしい場所を得ることができず、 ロランをはじめとする世界の偉人の精神に触れることができ、 孤独な翻訳の仕事に一生を捧げました。 それを優 しか

文化論が一層大きな意味を持つようになったと言えるでしょう。 開放の時代になって再び花開きました。 傅雷が一九四○年代~五○年代にまいた種は、文革中も 中国が世界の文学・芸術に対して扉を開いた今日、 「赤子の心」を持つ人々の間でひそかに育てられ、 傅雷の西洋芸術論 東西

続けているのです。 そしてロランの思想もまた、 傅雷・傅聡父子という存在を通じて中国的な展開を遂げ、 今も中国人の心の中に生

付記

便り」である。 「ロマン・ロラン研究』第二六号(ロマン・ロラン協会発行、 講演会終了後、 本稿は二○○八年六月二八日に関西日仏学館で行われたロマン・ロランセミナーでの講演を元にしたものである。 傅雷の手紙と、中国文学芸術界連合会弁公室からの手紙計二通が紹介され、 ロマン・ロラン研究所会員の黒柳大造氏から、傅雷と日本との接点を示す貴重な資料が寄せられた。 一九五六年三月)七四二頁に掲載された 同協会がそれらの手紙を 「中国からの

のは、 出すことのできた貴重な時期である。 傅雷の手紙が書かれたのは一九五五年末であり、 共産党指導部の特別のはからいがあったからだという。) (傅雷が 「右派分子」のレッテルを貼られた後も傅聡と文通することができた その後五七年には反右派闘争が始まるから、 外 国 に自 由に手紙を

得るに至った経緯が述べられている。

本語はできないため、 人に宛てたものはない)。さまざまな意味で珍しい手紙であるから、ここでは「中国からの便り」の全文を掲載して 傅雷はそれまで、翻訳の参考とするために、フランスの友人に問い合わせの手紙を出すことがあったらしいが、 日本人と通信したことはまずなかったと思われる (『傅雷全集』に収録された書簡にも、 日 日 本

菌 からの便り 紹介したい

(原文の正字はすべて常用漢字に置き換えた)。

その一

「ジャン・クリストフ」の訳者から。

(上海、

一九五五年一二月二一日)

常に忙がしいのです。 私は日本語が読めませんので、貴方の連絡なさりたかつたことは全然分りません。あらためて、 ランス語なり、英語なりで私に書くようにして下さい。貴国語の分る友人がみな上海に居らず、それに彼らは非 中国語なり、

一一月一○日附の貴方の御手紙と「ロマン・ロラン研究」を送つて下さつたこと、感謝致します。残念ながら、

最初の翻訳は一九三九年に発行されて数回再版され、二度目の翻訳は一九五三年に発行されました。私の を訳しはじめたことをお知らせすれば、 ところで、私が一九三○年から一九三四年の間にベートーヴェンとトルストイとミケランジェロの三つの伝記 多分興味をお感じになることでしよう。私の「ジャン・クリストフ」の

ショパン国際コンクールで入賞しました。私の息子は小さい時から、この二つの書物に深く影響されて来ていま Ts'ong)の人間形成に現われています。彼は、一九五五年の二月、三月にワルシャワで行われたフレデリック・ ン・クリストフ」と「ベートーヴェンの生涯」の中国語訳の最も大きな影響が私の息子フー・ツォン

す。

貴方の御依願に応えられなくて大変残念ですが、どうか私の真情をお信じ下さい。

傅雷(Fou Lai)

その二

大へんよろこんでおります。彼は貴国を訪問致しますので、貴方の御質問の件については、事務室の方でお答え 私どもの会の郭沫若主席は、貴方からのお便りを受取り、貴方がたの「ロマン・ロラン協会」の様子を知つて、

するよう依頼してまいりました。

八第五十号。ジャン・クリストフ、ベートーヴェン伝、トルストイを訳しております。また黄秋雲という人は、 わが国でのロマン・ロランの作品の翻訳者としては、傅雷という人がおります。アドレスは、上海江蘇路二四

アドレス、北京東総布胡同二十二号文芸学習編集部。「魅せられたる魂」を訳したほか、研究書も著しておりま

す。

彼らと御連絡下さるようお願い致します。

一九五五年十二月三日

(中国文学芸術界連合会弁公室)

日本ロマン・ロラン協会殿

k

国でのロラン愛好者の集まりの有無を尋ね、 昨年末の東京の中国見本市で中国語訳の「ジャン・クリストフ」が出品されていた。その訳者の傅雷氏に、中 もしあれば交流したい旨、手紙を出したが、日本文であつたためこ

— 20 -

のような返事をいただいたが、フー・ツォン氏の事など意外な事が知れてうれしかつた。

力をお願いする。 合会に紹介を求め、 つづく郭沫若先生らの来日の際、 残念なことに直接お会いできなかつた。 第二の手紙のような返事をいただいた。この返事は郭沫若先生らが羽田を去る当日に着いた ロランを通じての日中両国の交流を深めたいという気持で中国文学芸術界連 しかしこれをきつかけに中国との交流を続けたい。 皆さん の御

日本からの手紙に、 手紙のやりとりがあった一九五五年は、 用件がわからないながらも喜んで筆を執り、息子のことに触れずにいられない様子が伝わってく 傅聡がショパンコンクールに入賞し、傅雷にとって最も輝かしい年だった。

傅雷の手紙は中国語で書かれていたのか、それともフランス語で書かれていたのだろうか。またもしも、 **傅聡の「人間形成」とロランの作品との関係について、** 明確に断言していることも注目される。

の手紙がフランス語なり英語なりで書かれていて、用件が通じていたら、傅雷はどんな返事を書いたのだろうか。 賏

味は尽きない。

八一年三月)によれば、『魅せられたる魂』(中国語題名『母与子』(母と子))は、文革終了後の一九八〇年に全訳の きるのと同時に、黄秋雲という名前が目を引く。相浦杲「ロマン・ロランと中国文学Ⅱ」(『ユニテ』第十三号、 第二の中国文学芸術界連合会からの手紙についてであるが、 ロランの翻訳者としての傅雷の存在感を改めて確認で 一九

刊行が開始されたが、 陳実・秋雲の共訳、 それ以前にダイジェスト版が存在した。一九五一年に広州で出版された『搏闘』(格闘) 英訳本からの重訳で、 ページ数が原著のほぼ五分の一であるという。つまり訳者の一人

「秋雲」が、手紙で言うところの黄秋雲であろう。

(黄秋耘とも) は、『中国作家大辞典』などによれば、一九一八年生まれ、 広東出身の作家である。

訳本からの重訳ということであるから、フランス語はできなかったのだろう。なおいずれの辞典にも、 の常務編集委員も務めた。 ○年代から作品を発表し始め、 見るかぎり留学経験はなく、 建国後は広州、 福建などで文芸・出版界の要職を歴任。手紙にあるように『文芸学習』 外国文学の研究・紹介に専念した人ではない。 『搏闘』 業績として は英

『搏闘』やロラン関係の研究書は挙げられていない。

界連合会からの返事を受け取ってから、一九五六年九月に改めて黄秋雲に手紙を出したようだ。黄秋雲の返書とは以 下のようであった。 ン小伝の著者から」として黄秋雲からの手紙が掲載されている。それによれば、 黒柳大造氏の調査によれば、 その後『ロマン・ロラン研究』第三一号(一九五七年四月)に ロマン・ロラン協会は中国文学芸術 「中国のロマン・ 口 ラ

貴方達は其中の部分文章を貴会の会誌に載せる事は私は完全同意です。 幾年か前、 九月廿九日の御手紙拝見致し候。 私は 「羅曼羅蘭 (ロマン・ロラン) の小伝」を書いた。ここに寄贈します。 仕事が忙しいため返信がおくれました。 すみませんでした。 御指教下さい。 例えば

国作家協会広州分会) 扨私の知らせた羅曼羅蘭の作品に対して突趣が有るのは鐘敬文教授 です。 彼等は羅曼羅蘭に関する文章を書く事も有る。 (北京師範大学)と作家洪遒先生 (広州中

魯迅先生と羅曼羅蘭は直接通信 の事はないと思う、 しかし彼の文章は屡度羅曼羅蘭の名前を書く事が有る。

日本文の書いた御手紙は私は非常に歓迎です。

此致

健康を祈り。

「から想像するに、 ロマン・ロラン協会からの用件の一つは、「魯迅とロランの間に直接通信の事実があっ

宛てて書いたとされる手紙をさがしていることが述べられている。黄秋雲との文通は、こうした日本側の関心 マン・ロラン」という特集を組んでおり、 ということの問い合わせだったのだろう。 のちに『ロマン・ロラン研究』第五九号(一九六二年四月) 蜷川譲が論文「魯迅とロマン・ロランの問題点」の中で、< ロランが魯迅に は 「魯迅とロ のあり たか

の嫌疑をかけられたからである。ロマン・ロラン協会と傅雷および黄秋雲との交流は、始まってほどなくして絶たれ かを反映しているようだ。 ように中国の国内事情から、 もしもロマン・ロラン協会と傅雷との文通が継続されていれば、 文通は困難になった。反右派闘争以降の中国では、 同様の話題が提起された可能性があるが、 外国人と通信すれば容易に「スパイ」 前 述の

一九〇九~一九九八)で、『欣悦的霊魂』という直訳で知られた作品に『母与子』という表題を初めて与えた。

中国における『魅せられたる魂』の翻訳・紹介について補足すれば、

全訳を手がけたのはフランス文学者の羅

ることになった。

抜いたことが異なってい 。ロマン・ロラン論』(一九七九年刊行)でも知られる羅大岡は、 生年が傅雷とほぼ同じ、 パリ大学留学という経歴も似ているが、 病躯を押して、十年の歳月をかけて翻訳に取り組ん 中国社会科学院に籍を置き、 文革を生き

に照らして分析している。 相浦杲は前掲論文で、 羅大岡の 在野の翻訳家であった傅雷とは異なり、 『ロマン・ロラン論』 における「苦渋にみちた論点移動」を、 公職にあった羅大岡には、 政治的圧力の元でなお 文革という時代背景

研究を続けなければならないという別の苦悩があった。 『訳の中に昇華しようとしたと考えるのはうがちすぎだろうか。 羅大岡が『ロマン・ロラン論』では書き尽くせなか ちなみに羅訳の『母与子』は、 現在も中 った思い

店で入手することができる

が、 て国務院副総理等の要職を務めた。戦前日本に留学して日本人女性と家庭を持つなど、 やはり文革期には迫害を免れなかった。 手紙で言及された中国文学芸術界連合会主席の郭沫若は、文学創作や歴史研究で知られ、 日本とは縁の深い人物である 政治面

中文化人のささやかな交流が、歴史のはざまに確かに存在したことを教えてくれる。 「中国からの手紙」は、 ロランの紹介者としての傅雷の地位を客観的に示しているだけでなく、ロランを愛する日

見」をもたらして下さったロマン・ロランセミナー関係者のみなさまに厚く御礼申し上げたい。 資料の存在を知らせ、自ら関連する調査を行って下さった黒柳大造氏に心から感謝申し上げるとともに、この

1 成柏泉「《約翰・克利斯朵夫》在中国」『読書』一九八〇年八期、 四六頁

- 榎本泰子「『傅雷家書』――父が息子に語る音楽」 ン・クリストフ』と中国知識人」『比較文学』第三五巻、一九九三年三月など。 」『比較文学研究』第六二号、一九九二年一二月および同「傅雷
- 3 『ロマン・ロラン全集』 第三九巻、 みすず書房、 一九八二年、四九五頁。「ロマン・ロランからフー・ヌー・エン
- 4 榎本泰子訳『君よ弦外の音を聴け ピアニストの息子に宛てた父の手紙』 九一~九二頁。 一九五五年一月二六日付書簡

ヌー・エンは傅雷の号「怒安」。一九三四年六月三○日付書簡

- 6 傅雷 『君よ弦外の音を聴け』八〇~八一頁。一九五四年十一月二三日付書簡 一九八四年、二二~二三頁

5

『傅雷全集』第八巻、六~七頁 「傅聡的成長」『与傅聡談音楽』艾雨編、三聯書店、

- 8 『君よ弦外の音を聴け』一八三~一八四頁。一九六〇年八月五日付書簡。
- 10 9 『君よ弦外の音を聴け』二一六頁。一九六一年二月七日付書簡 『傅雷全集』第一九巻、三〇〇頁。一九六二年一月二一日付傅聡宛の書簡。 この手紙は『君よ弦外の音を聴け』には収録
- 『傅雷全集』第二〇巻、一〇頁。一九三四年八月二〇日付ロラン宛の書簡。

されていない。

11

『君よ弦外の音を聴け』二八六頁。朱人秀(妻・朱梅馥の兄)宛の遺書。

- 13 傅敏編『走出家書 ——与傅聡対談』天津社会科学院出版社、二〇〇五年、五二頁。 ダイ・シージエ『バルザックと小さな中国のお針子』新島進訳、早川書房、二○○二年、一○七~一○八頁。
- 15 『君よ弦外の音を聴け』九一~九二頁。一九五五年一月二六日付書簡。

(中央大学文学部教授・比較文化)

口 マン・ロランを「あたま」でなく「からだ」でよみ、きく

尾 埜 善 司

一 ロマン・ロランと宮本正清

(1) 宮本さんとのめぐり合い

一八九八~一九八二)は、早稲田大学を出てすぐ関西日仏学館(峨日仏文化協会)へ赴任し、日本側のトップとし 日本で初めてロランを卒業論文とし、子供のための『ロマン・ロラン物語』(文教書院)を翻訳出版した宮本さん

て語学教育と文化交流のため生涯を捧げました。

生の『魅せられたる魂』の訳文は、どのページにも力がこもってますね。」「今度出された詩集『生命の歌』に感動し 高校二年ロランにめぐり合い、一九五○年(十九歳)京大に入ると、まっ先に宮本さんのお宅を訪ねました。「先

《一日の生活を、まこと生くる者の上に、光あれ》

ました。」帰って書いた詳しい日記は、この詩集の一句で結びました。

ていますよ。」と言って、一冊の本の包みを下さいました。詩集《生命の歌》の、出たばかりの新装版でした! これが宮本先生とまともにお目にかかる最後となりました。礼節の人で、日仏文化協会やロマン・ロラン研究所の 二十四年を経て喜寿のお祝いの時、つかつか私の前に来て、「あなたが初めて私の宅へ見えた時のこと、よく憶え

役員を引き受けるよう丁重な手紙で求められ、 協会が現地採用教員から訴訟を起こされた時は、日仏学館長を連れて

私の事務所へ依頼に見えました。

さんは山科日ノ岡に眠られています。

ご縁はどこまでも深く、二十年前、宮本さんの跡を承けて、 ロマン・ロラン研究所理事長の職につきました。宮本

(2)宮本正清と作曲家中田喜直

詞は一九二二年~一九二八年(二四~三○歳)だから、二○歳台の二人が共鳴したわけです。うち四曲はレコード化 の詩集『生命の歌』を読んで感動共鳴し、詩五編を選んで作曲しました。(一九五〇年 二十七歳)『生命の歌』 「雪の降る町を」や「夏が来れば思い出す」で誰もが知っている中田喜直(一九二三~二○○○)は、出たばかり の作

1 秋 されました。

くろかみは しょうしょう 海 今朝 かぎりなく ふかし くろかみを梳く 秋ふかし

2 未知の扉

ちまたに家並に はるさめす

心まずしく しずかに 誰か天降りてきて 扉に 指をふるるらし まつわりや……

さゆらげる

香のけむりの

ははのねがおのやすけさに

小さな手

3

小さな手 五月のまひるの光りに さしのべられた 小さな手 ふかい闇の大地から 小首をもたげ ただ大空にあこがれる

若柳のかよわい芽

言葉をもたねば かれら幼いもの ひたすらに 手をさしのぶ

おもい

4

めさめれば

ゆき そっとふる

かえらぬものよ おもいはきえず

はるのけはいか こころうずき

彼方にはあらしが! 私には空虚の絶望が! 5

彼方にはあらしが

のこされたこころは 一言の愛惜も慰めものこさず ささげるこころを蹴って 深傷をいだき 今日も黙す

愛に敗れたこころは 絶望のくるしみから あらしの世界に とびこんで行った者よ! 祈るのだ

みどろなたたかいの中の おんみのために!

·田喜直歌曲集 (一九五九頃) キングSKF三〇〇三

中田喜直女性合唱曲集(一九六〇) 未知の扉 独唱 伊藤京子 キングSKK一四九 ピアノ 川村深雪

*

1

2

3 小 さい手 4 おもい 日本女性合唱

指揮

三宅清

郎郎

ピアノ

男性独唱歌曲 レコード未刊

5 彼方にはあらしが

いうので、 さわしい。だから曲の末尾にロラン筆の楽譜がつけられている。岩波文庫では片山敏彦の自筆訳で付いていたのに、 でロラン関係のレコード群を聴いてもらった時、やはり彼女の伴奏で歌いました。なぜくり返し歌うかと言うと、こ がついた。スイス、 ちゃんに楽譜を渡したら、「うーん、この曲だけはずいぶん長いし歌も伴奏も滅茶むつかしいな。けど、やるか。」と 譜は保管してあるとのこと。そこで去る二○○八年九月十六日、関西日仏学館稲畑ホールでの講演で、 れは終幕近くで女の農民たちが歌いつつ、 してもらい、男性曲は演奏歴もなく、では世界初演をやらかそう!と、中学の恩師の娘、名ピアニストの沖本ひとみ が レコード化されていないのは男性曲だからでしょうが、宮本ヱイ子さんに尋ねると、 何とか歌い切りました。あと同じ伴奏でロランのフランス革命劇の終曲『獅子座の流星群』の末尾に楽譜 ソリュール地方の民謡「クリスマスの歌」(ドイツ語)を歌いました。これは五年前このホール 山を降りてくる歌が幕の裏に聞こえる。大変静かで、 幸い中田氏から届いた楽 和解劇の終わりにふ 四曲はCD化

すずの全集ではなぜか欠落しており、一般に見れない。 それで、 すばらしい曲だし、 少しでも多くの人に聴いても

二 ヴェズレーで宮本正清の詩を朗唱する

B

いたいのです。

楽譜をつけておきます。

ぞれ異った表情に朗唱しなければならないでしょう。「焼き殺されたいとし子ら」とは、 妻とその母に支えられヨタヨタと家へ戻る。八月十六日は宮本の誕生日! と張り切って朗唱にかかりました。「焼き殺されたいとし子らへ」は、戦争末期に宮本が学館のオーシュコルヌ教授 用の折り畳み奉書紙に詩をそれぞれ墨書して持参。先ず男優が読むのを聴くと、さっぱり張りがない。 のステージで、ノーマイク、というもので、予めロラン研究所に要請がありました。私は例のいたずら気から、 次いで私が原文を、次いで「わらい」を同様に交互に朗唱する。大寺院の六○mの身廊の奥、高さ一八m 唱する集いを開きました。 銘打ち、 フランスのロマン・ロラン協会は、 十月四日午後八時半から、ヴェズレーの世界遺産サント・マドレーヌ大寺院で、宮本正清の詩二扁を単独朗 何らの理由も告げられず、 先ずコメディー・フランセーズの男優が「焼き殺されたいとし子らへ」のフランス訳を、 特高に逮捕、六十一日間激しく拷問され、 第一次世界大戦終結から九○年に当たる二○○八年をロマン・ロラン国際年と 詩は 敗戦の翌日、八月十六日に釈放され、 (自由) 自宅から押収され、 を一〇回くり返すが、 むしろ有難い、 の円蓋の下

○○名の人々が大喝采してくれました。ほくは今ここで、なぜこんな稀有なことをしているのか、と全く不可思議な 前に拡げている奉書紙を廻して表を聴衆側に拡げてかかげ、墨書の日本字を見てもらいました。 の「わらい」 は、三十年前の青春を想うコラ・ブルニョンの笑いに満ちた短詩。 ほほえみつつ すると堂に満ちた四 唱 終って、

に焼却された、

子供たちの成長を精しく記した日記やメモを指しています。

Weihnachtslied (Chant de Noël)

(pour la fin de l'Acte II)















『クリスマスの歌

ソリュール地方の民謡

山敏彦訳

眠れ神のいとし子、

眠れ、うまし子

おさな子眠れ

まづしき子ら 心こめて集い歌う み空の風をおくりつ

-31-

気持ちでした。

え、ヴェズレーの夜は更けました

引続いて日本の名ピアニスト神谷郁代さんが作品一一一ほかベートーヴェンの三つの単楽章を弾き、 深い感銘を与

れていますので、そのコピーをご覧下さい。 当日配付されたパンフには、 出演者のほか詩の原文と仏文と、宮本さんとロラン夫人が語り合う姿が周到に収載さ

一 ロマン・ロランを「あたま」でなく「からだ」でよみ、きく

に示唆され、 山折哲雄さんが『親鸞を読む』(二○○八 岩波新書)で、「あたま」でなく「からだ」で読もう、と提唱されたの ロランに新しく迫るイメージを一ケ月暖め、昨年九月十六日、関西日仏学館稲畑ホールでの講演で表現

しました。

① ピアノ弾奏 ベートーヴェン悲愴ソナタの冒頭

レコード「ロマン・ロラン」(二〇世紀の作家一二)

仏 フィリップス (一九五五年頃) 日 フィリップス(一九六七年)

とも言えない短いものであるが、しかしあれでロランが窺えるだろう。あそこに『音楽』があるのだ。音楽の魂 で弾奏を聞かせてもらえた高田博厚は、「ピアノを弾くロラン。そこに彼の一切が現われる。」この演奏は ロランは物故者のため、演奏をこれに代えたと考えられる。たまにロランを訪ねると、いつも練習用の箱ピアノ 冒頭のピアノ演奏者の名は示されていないが、他の作家は制作時現存で、インタビューが録音されたのに対し、

が露出しているのだ。」と述べている。(「ロマン・ロランのピアノ演奏」「LP手帳」一九六七年七月号

Journées Internationales Romain Rolland 2008

organisées par l'*Association Romain Rolland*à l'occasion du 90ème anniversaire de la fin de Grande Guerre

poèmes de Masakiyo MIYAMOTO dit par un comédien français et un lecteur japonais : Zenji ONO

le 4 octobre à 20h30, narthex de la basilique de Vézelay

À mes chers enfants brûlés

Masakiyo MIYAMOTO

Soixante-et-un jours enfermé
soixante-et-un jours aux frontières de la famine
le corps amaigri épuisé
disloqué et l'esprit plein de stupeur
et le seize août
me voici brutalement sous le ciel bleu
me voici rejeté sous la lumière du jour
la chair et et l'âme á demi crues
je vivais tout simplement

je suis libre! crie ma pupille

qui fixe le chemin, la maison, la verdure, le ciel, les hommes, la poussière

et la liberté!

l'effrayante liberté

je suis libre! crie ma gorge,
libre de boire autant d'eau que je le souhaite!
libre de pisser tout mon saoul!
ah, la plus grande liberté qui soit sur terre,
elle est mienne à présent!
sur la route peau brûlée par l'écrasant soleil brûlant d'août,
mon corps à bout de forces chemine

d'une voix qui perce le ciel et la terre je hurle, je crie, je m'époumone, je gueule pour célébrer ma liberté!

ma femme et sa vieille mère prennent soin de moi sur le chemin du retour je suis libre!

> Libre de m'exposer à la poussière tourbillonnante et à la saleté de la ville,

> > libre d'attendre interminablement un train qui ne viendra jamais

libre de faire couler toute l'eau qu'il faudra pour nettoyer les fleuves de larmes, la sueur et la saleté de ces soixante-etune journées

Je suis libre.

(Traduit du japonais par Didier Chiche)

焼き殺されたいとし子らへ

宮 本 正.

清

飢餓の一線で支えられた六十一日

六十一日の牢獄

やせおとろえた肉体と

あちこちのねじがぬけおち、ゆるんだ精神

八月十六日

とつぜん青空のもとに

半生の肉体と精神に

日の光のなかに投りだされたわたしは

ただ生きていたのだ

自由だ! わたしの眸はさけぶ おそろしい自由を!

自由だ! わたしの喉はさけぶ

道を、家を、緑を、空を、人を、埃りをみる自由を!

小便をしたいときにする自由・ のみたいだけ水をのむ自由!

ああ、世界の最大の自由があるのだ

このおれには今!

衰えきったわたしの肉体はたどりつつ 八月の烈日にやけただれる道を

泣きさけび、どなり、おらび、 天地もつらぬくばかり

わめき

よろこびたいこの自由だ!

だまって、ひょろひょろとあるきながら

妻とその老母にいたわられてかえる途に

おれは自由だ!

ふきまくられる自由だ 都大路をふきまくる塵あくたの竜巻きに

いつまでもこない電車を

いつまでも待っていられる俺は自由だ

水道を顔からあびながら

じゃあじゃあ

ながしてもかまわないおれは自由だ 六十一日の油汗とともに万こくの涙を

— 36 —

Sourire

Épuisé de travail
je relis *Colas Breugnon*;
je suis seul à ma fenêtre,
entre le sourire et les larmes.

Maître Colas Breugnon
rit, se résigne et cause,
songeant à celle que dans sa jeunesse passionnée
il n'avait pas épousée trente ans plus tôt.

Comme lui je reviens trente années en arrière,
et je revois ma jeunesse :
la joie et l'allégresse au cœur
mes larmes jaillissent.
À ma fenêtre qu'inonde la lumière du mois d'août
je pleure ma jeunesse.... (août 1947)

(Traduit du japonais par Didier Chiche)

わらい 仕事につかれて コラ ブルニョンを読み ひとりで、窓で笑った 涙がでた 笑って、あきらめて、しやべったのだ 笑って、あきらめて、しやべったのだ

宮本正清

八月の明るい窓で

涙がわいたのだ

こんなに若い自分を……

嬉しくて、たのしくて、

わたしも三十年昔の

(一九四七・八)



Marie Rolland et Masakiyo Miyamoto en 1968 à Kyoto

Masakiyo MIYAMOTO (1898–1982), traducteur principal de Romain Rolland au Japon, était également professeur et secrétaire général de l'Institut franco-japonais du Kansai depuis sa fondation en 1927 per Paul Claudel, et s'est dévoué au rayonnement culturel de la France. Il est l'auteur de la première traduction complète de l'Âme enchantée, publiée dans les années 40, alors que le Japon sombrait dans le militarisme et l'autoritarisme, tendance apparue depuis les années 30 et renforcée par le ralliement du pays aux puissances de l'Axe. Le 15 juin 1945, peu de temps après la confiscation des locaux de l'Institut voués à l'industrie de guerre, il est arbitrairement arrêté et torturé jusqu'au 16 août 1945, lendeman de la capitulation du Japon. Il a fait preuve d'un grand courage et d'une grande volonté de résistance dans l'esprit de Romain Rolland.

Le titre fait allusion à tous ses documents qui avaient été confisqués puis brûlés au moment de son arrestation.

ちなみにロランは、イヴ・ナットのベートーヴェン演奏を好んだ。

2

一九三六年八月、アムステルダム、反ファシズムデモへのメッセージとして、右のレコードに録音されている。

あの鳥がはばたき飛んでいるような書体は、三十歳台頃に定着したようである。サインに限らず全文章。

若々しい声。

③ サインの書体

④ 対話、独り言、まなざし

に実に貴重な経験をしているのだという感慨に圧倒された。ありえないことに会っている。……そっと書斎を抜 男女の合唱の声。「近くの若者達がガンジーのために歌うのだよ。この地方の古い民謡だ。」……私は人生の一時 する。彼の素描でもする気ですぐ来なさい。君だけを呼ぶ。」とのロランからの手紙で、すぐヴィルヌーブへ赴 いた。ある日の午後、ロランは高田を散歩に誘い、夕食後書斎でベートーヴェンのソナタを弾いた。終わった頃、 一九三一年、日本からパリに移住した高田博厚は、秋になって「ガンジーとオルガ荘で一時間ずつ五日間会談

け出て、誰もいない長椅子に坐った。自分がみじめに思える。……扉が開いて部屋外套にくるまった師が入って

来た。「タカダ、君パリへ帰るのに……要るだろう……」

や、いや、君のパリでの生活が苦しいのを知っている……。」私はこみ上げてくる涙を押さえきれなかった。師 は私の傍に坐って私の頭を抱いたままじっとしていた。…… 「そんな……そんな……送って下さったお金で往復切符は買ってあるから、大丈夫です。……そんな……。」「い 弁解するようにつぶやいて、私の上着のポケットに紙包みを不器用に押し込んだ。私はもう声がふるえていた。 (ガンジーとの一 週間)

ールでこの文章を読み上げながら、私も泣いてしまいました。ロランは、こんなにも優しい人なのです。

— 40 -

部屋外套」というのは、 日本で言えば「どてら」とか「丹前」でしょうか。 ロランの「部屋外套」の暖かさが、

⑤ 民事訴訟

私にも伝わって来ました。

ある。 陪審法廷で弁護士を応援。一九一三年二月、控訴審判決は二五、○○○フラン支払いを命令。 ·ストフからコラ・ブルニョンへ』) 『ジャン・クリストフ』執筆中の一九一○年十月、パリで道路を横断中自動車と接触。 フランスの公証人は、弁護士的な職務を含むようである。ロラン学者は、この訴訟記録や判決を調べるべ 訴訟とは意外に思われるかも知れないが、五代にもわたる公証人の家系で 損害賠償訴訟を起こし、 (日記 『ジャン・ク

⑥ 無言による呼びか

きではないか

今日フランス文壇の最も高貴な作家の一人である、 ロマン・ロランとは何であるか?彼は偉大な奉仕者である。思い出を語ろう。殆んど二〇年も前のことだ。 アルフォンス・シャトーブリアンは書いている。

ていた。 らされていた。 生きることについての激しい不安の状態であり、耐えている苦悩の原因がつかめない。どうにもやり切れず、私 語表現も訳出できないような「言葉」の息が、 、り終わって眼をあげた。 .ある晩ロマン・ロランのところへ出かけていった。冬の晩だった。彼は一人きりで、室は小さな一つの灯に照 唇が小きざみにふるえていた。殆んど認められない程の、 その視力は限りない慈愛に充ちていた。彼は黙っているのであった。そして、その無言が異常な無言で 自分の求めているものを見た。 私は坐って永い間話し、心の重み苦しみの一切を、友であり師である人に打ち明けた。 ロマン・ロランは、身体をまっすぐにして不動のまま、私という難破船に視力をむけ 私は、 かよわい肉の岸辺に漂うかのようだった。 自分自身を超えた上方を垣間見た。これこそ魂の贈り物で かすかな波の動きであった。どんな人間の言 そして突然、 私はしゃ

私は高校時代生きる方向に悩み、この文章を音読し心が慰められ癒されました。

(7) 彫像

高田博厚は、一九三一年日本からパリに移住し、片山敏彦の案内で初めてロランを訪ねた数日後、片山を通じ

と答えた て「人からの申出を断ってきたが、よければ私の肖像を作ってくれ」との伝言を受け、「ずっと先に、

三〇年後、高田はガンジーの頭像を二種作り上げ、ロマン・ロランの頭像を完成させた。(一九六一年六十一

歳)これはブロンズなので、三体ほど作られ、一体はなんと、私の仕事場に置かれ、私と毎日対面している。む ロランとのゆかりを知る亡き旧友が、画廊で見つけたとて持参してくれたのだ。 ありえないことが起きる!

 \equiv 日記『ジャン・クリストフからコラ・ブルニョンへ』 の風光

内容も極めて貴重である。 現在、 第一次大戦中の日記のほかに出版、 訳出 (山口三夫訳)されている日記は、これだけのようで、 その時期

ていた瞬間 『日記抄』は、『ジャン・クリストフ』が完了した一九一二年十月二日から始まる。 何年来呼び求めかつ恐れ

一九一三年二月十三日 いねむりについて、詳細に観察・論評しており興味深い。 例の控訴裁判に出廷し、双方の弁護士の尋問・弁論の内容・特徴・優劣、 陪審員たち

同年四月二十日 パリを去ってヴヴェー(スイス)へ。「私はスイスへ逃れるが、旅の楽しみのためではなく

私は喜んでパリの私の小さなアパルトマンに止まるだろう ―― そこではもはや静かに生きるてだてがない 私は逃げ出さねばならない。遠く離れ、ついに私自身と向き合い、十数冊の永遠の書物、 自然、 内 一面の生

神秘、 そして白紙の両手と共に、 孤独になる。ヴヴェー。モーゼル・パークホテル。 持ってきた書物 ゴン

ペール『ギリシャの思想家達』 ベルジュ『地球の生と死』 ペラン『原子』 ポワンカレ『最近の思想』など

十二冊|

きないのだ。私には他の肉体[複数]を創造することが必要だ。 芸術は私にとって遊びではない。 魂によってしか保っていない私の病める肉体の中では、私は生きることがで ――二十日間誰にも一言も言わなかった。 日々が

こんなに早く、軽々と流れて行ったことは、かつてなかった。新しい小説『奴さんはまだ生きている』を書き始

める。 私は彼の雰囲気、 大地や動物の生命でうるおされている。」

四 れ出る。 同年五月十七日 私は書きながら、 知的高揚の期間、 幸福のために笑う。 生の泉(今まで知らないでいた、私の内にある諸々の泉)がとうとうと流

(五)同年六月十五日 この国の魅力は、 多様な農業生活 -- ぶどう畑、 田畑、 牧場、 菜園 を保ってきたことだ。

田舎は立ち働く農民たちによって絶えず活気づけられている。

云 同年八月二十五日 恋愛 ──一一つの病気 ──神経的な全存在の一つの中毒。 約二 一週間それに毒され

ここで彼はヴェズレーの印象を記しています。 共にヴェズレーを経て、二十五年ぶりに故郷クラムシーに戻り、ブレーヴに墓参し、この日記抄を終わりますが、 九月半ば、 小旅行。ディジョン、アヴァロン、オータン、ロルムを経て、途上の風景を詳しく眺めつつ、 何故終生の地にヴェズレーの丘を選んだのか。それを窺い知れる

否か。

その記述を読んでおきます。

一つの塔がこの水平な量塊から突き出ている。頭のない横たわった身体……。 の木蔭を散歩するが、広々とした展望には個性がない。……」 した至高の尊厳を見たことがない。このロマネスクはゴチックより雄々しく見える。 その原因の一つは放置・荒廃によるが、主としてマッシブで単調なプロフィールを持つ様式自体だ。 芸術の絶頂に達している。 「いかなる壮大なヴィジョンが、地方を支配するたくましいカテドラルとなりえたのか。今は消えたが、 中世のほかのどの建物にも、これ以上に諧和的な力、 すばらしさの全ては内部にあ ……壁の廻り、 繊細な均衡感覚に結合

ヴェズレーにおける朝食のメニュー (ポスト及びリヨン・ドール・ホテル)―― ソーセージ、オムレツ、

私は同じホテルのビュッフェで朝食を頂き、ロランが芸術の絶頂と言う内陣の円蓋の下で、 独り詩を朗唱する

ところで、鈴木成高の名著『中世の町-風景』は次のように述べています。「フランスには、

幸せを頂いたのでした。

ハム、

臓物料理、

豚の焼肉、あひる、デザート ---。

の伊達男みたような、 語るに足るものが一つだけある。 西部にある。 ……まことに小さくて簡単な町、 飾り気のないしゃれた町。そこに私は《フランス》を見出す。」 しかも第一級の中世都市である。それはヴェズレーという小さな町。 しかし瀟洒で気品のある、垢抜けした町である。 ブルゴー

四 ロマン・ロランが初めて会った日本人

れて『ジャン・クリストフ』を読んで感動し、一九一四年ロランに手紙を出し返信を受け、一九一六年『トルストイ 日本人で初めてロマン・ロランを訪ねたのは成瀬正一(一八九二~一九三六)です。友人の芥川龍之介にすすめら

中世都市として

弾いて聞かせ、語り合いました。「下手なフランス語を丁寧に聞いてくれた。すべてを語り終わらないうちに早合点 所からよく来てくれましたね。」時に成瀬二十六歳、ロラン五十二歳。当夜ロランは彼にご馳走し、書斎でピアノを 心地がした。」 することは決してない。一語ごとに集中した注意が自分に向かっているのを感じると、満足のような恐ろしいような 大戦が終わった一九一八年七月二十日、 ロランの部屋の一階上に投宿しました。思いがけずロラン自身がすぐ成瀬の部屋へやって来ました。 ロランが長期止宿していたヴィルヌーヴの「バイロン・ホテル」に 。「遠い ロラン

マン湖畔を、 十六日にわたる滞在の日々、ロランは「もう昼寝しましたか?」と成瀬の部屋をのぞき、 ただ黙々と一緒に歩いて廻りました。 近くの草原や森や山

※関口安義『評伝 成瀬正一』(日本エディタースクール)参照

く話すことがまたとできるか、 ロランは 『戦時の日記』に、成瀬のことを八月四日に別れたあと、 疑わしい。彼はすこぶる誠実で、愛情のこもった信頼が心を自由にし、素朴に至った。 精しく書いています。「日本人とこれほど親

新このかた、 庭では、と問うと、 アジアとアメリカの衝突が避けがたく切迫している。万人の心に物質的現実主義。公的に排除された道徳観念は、 民族の道徳生活は地に堕ちた。欧米に脅される日本は、物質力の征服に傾斜し、 家庭の義務は残っているが、それは実益ありと思うからで、道徳的理想ではないと言う。 古来の魂、 賢者の崇高 明治維

「日本では誰も理想主義によって戦争しません。だから日本人は戦争においては恐ろしいのです。 猛獣みたいです。」 な伝統を放棄してしまう。

彼は乃木将軍を尊敬崇拝している。

人情をもって人を感動させる人物だ。」成瀬は言う。

別れる前夜 「十一時迄ロランと語れり。 自分の説の為に入牢することあるべきを語り、 彼は歯を噛み、

(二〇〇九年二月二十一日)

上光彦

村

介した。資料四十七は、この手紙にたいしてド・パイユレ神父がロランに送った、一九四二年十一月十二日付の返書 前号で資料四十六(一九四二年十一月八日付、ロマン・ロランからミシェル・ド・パイユレ神父あての手紙)

だ。それはこう始まっている。 に寄せている愛情からしても、またわたしのキリスト者としての気持ちからしても、このお手紙に深く心を打たれ 「先生はこのお手紙のなかで、素直に、また誠実に《待機の姿勢》という言い方をしておられます。 わたしが先生

れる。それにしても、つぎに続くくだりでは、神父としてもロランを控え室に留まらせて、本来の信者と区別をつけ い方からも、ド・パイユレ神父がなんとかしてロマン・ロランを信者仲間に引き入れたがっている気持ちがうかがわ であることに注意しよう。つぎに出てくる《わたしたち》も同様だ。神父は言う。「〈神〉はひとりしかおられず、 に同じ たしたちは真心からこの ついで神父は、ロランが《〈教会〉の〈神〉》という言い方をしたのに反発して、「わたしたちが崇拝するのはまさ 〈神〉なのです」と言う。このばあいの《わたしたち》が、彼自身と文通相手であるロランとを含めた代名詞 のなかで、 先生は 〈神〉に祈っているのです。わたしども[神父たちを初めとするカトリック信者たち] ―― 見た目には ――控え室のなかで祈っておられるのですが」。一人称複数の代名詞の使 わ は

ることを見てとる。「しかし先生には、 ロランが 神〉 を信じていないことをいちおう認める。 信仰への絶えることのない希望があります。わたしにそうおっしゃっておい しかし彼は、ロマン・ロランに信仰への 希望が あ

十一章第一節〕)と。——また逆に、希望は〈神〉に支えられたものであれば、必然的にまことの てるものなのではないでしょうか。わたしとしては、そう信じております」。そして、神父はこう続ける。 おります。 うなのでは? 先生の息そのものと一体をなす欲求だと。これはすでに 《信仰とは、 〈信仰〉が 望んでいることを確認 [……] することです》 [原文、ラテン語。 「ヘブライ人への手紙」第 《一種の希望》であることが真実だとすれば 〈信仰〉ではないでしょうか、あるいはほとんどそ (聖パウロはまさにそのような考え方をして 〈信仰〉 を証し立

しはしないだろう》という……パスカルのあれです」。 う劇的なのです)。先生は探しておいでです。なぜならすでに おまえはわたしを否定などしないだろうに……》先生はもはや否定の段階を抜けでておいでです。しかし、 おられます。《信じないとは、やはり信ずることなのである……。もしわたしたちが格闘しているのでなかったら、 〈神〉と格闘しておいでです。(それはまさにヤコブと〈天使〉との格闘ですが、 〈彼〉を見いだされたがゆえに。《おまえはわたしを探 病気との闘いよりもさらにいっそ

〈信仰〉

は帰依ではありますが、また同時に探求でもあります。先生ご自身、『内面の旅路』のなかでこう記して

にわたしを見いだしたのでなかったら、 ここに《パスカルの》とあるのは、『パンセ』中の「イエスの秘儀」に見られる「心を慰めよ、 おまえはわたしを探しはしないだろう」という語句を念頭に置い

スカルのこの断章と相通ずることを、 聖ベルナール・ド・クレルヴォー(一○九一-一一五三) がすでに語

御身が御身を探している魂にたいして親切であられるならば、いったい、御身を見いだした魂にた

いしてはどのようであられますか。ところで、こういうすばらしいことがございます。 なんぴとも御身を探すことができないということでございます」。 まず御身を見いだしてからで

機的な時期に関連している。そこで『内面の旅路』を手に取り、この引用文に先立つ何ページかを読み返そう。 ・パイユレ神父が 『内面の旅路』から引用した語句は、たしかにロマン・ロランの生涯のうちでも、

だったり、 また終生変わらず-ても言い表しようがない。しかも、 り一八八○年ごろのパリの精神的雰囲気すべてが、どれほどまでに〈神殺し〉のそれであったか、 には知るよしもなかった。)……まわりにいるあらゆる人たち — 先生たちも、級友たちも — の精神が、つま 開きになっていた。戸のうしろには、なにもありはしなかった。〈主〉は家を荒れ果てたまま捨て去ってしまわ たぶんわきの部屋におられるのだと思ったものだ。パリに来て数ケ月経ったころには、部屋という部屋の戸が半 ことはなかった。できるかぎり祈ったときでも、〈神〉はけっしてそこにいなかった。しかしわたしは、 じつを言うと、地方にいて、自分では信じているつもりだったころ、わたしは一度として生ける〈神〉に会った であった。わたしの存在はとろけて、精神は大気の虚無のうちに、 しかし学校での混迷は内面生活の混迷と較べればなにものでもなかった。〈神〉 家は薄暗がりに浸っていた。(それが夜明けの薄暗がりで、夜の暗がりなわけではないのかどうか、 わたしはよく転んだ。通りで、何度も転んだのだ(その場所が、まだ目に浮かぶ。 ムシュウ・ル・プランス通りとサン=ミシェル大通りとが交わる角**から、 -宗教的で、〈神〉の子とも言えるものだったのである。—— それゆえ、殺されたのはわた わたしの存在の本質は、自分では気がつかなかったものの、 肉体は墓場のどぶのなかに溶け込んでい が死んでしまったのだ。 いまは取り壊されてし ド・ビュシー通り あの当時 わたしにはと (神) は わたし

シテ島西端のポン=ヌフ橋を南側に渡り、 橋の延長上を進むとドフィーヌ通りに入る。ドフィーヌ通りの南端にド

かの幽霊たちのなかに混ざった、ひとりの幽霊だった。なにものも、ありはしなかった……。

ビュシー四つ辻がある。ド・ビュシー通りは、その交差点から西に向かう短い通りである。 その角は、パンテオンから西へ降りてくるスフロ通り、リュクサンブール庭園に沿った=メディシス通りおよびサ

ン=ミシェル大通り、それにゲー=リュサック通りとも交わる。そこにある広場がエドモン=ロスタン広場であって、

— 49 —

ヴィエーヴ** の急斜面に向かって突きだした高い岬から見下ろしているようで、なんという誘惑を覚えたこと 地六階 (わたしたちの新しい住居*)の部屋の鉄の欄干に屈み込んだときには、モンターニュ=サント=ジュヌ

わたしは深淵から立ちのぼる蒸気を呼吸していた。それゆえ、

モンジュ通り三十一番

十五歳から十七歳まで、

リュクサンブール庭園の入り口に面する。

捻りして、わたしをうかがい見ている怪物からわが身をもぎはなしてやった。とにもかくにも、未知なる 〈力〉が、わたしの なんの努力もしなくてよい。ただ、身を任せるだけのこと! 〈宿命〉 が、わたしの首根っこをぐっと掴んで、わたしを崖縁に戻してくれた。生きよ、 -- しかし、肉をささくれ立たせ**、** 腰を一

ぱっくりと口を開けた虚無の唇の奥へ、下をめがけてただ吸い込まれていきたいという、なんという誘惑

に住みついた。そのあと、やはり第六区のモンジュ通り三十一番地六階の新居に移ったのだ。リュクサンブール庭園 移ってきた。母親が、長男のロマンにパリで教育を受けさせようと決心したからだ。母方の祖父もいっしょに移って を東へ降りていけばよい。古代ローマ時代の遺構アレーヌ(円形闘技場)の残欠が近くにある。 からモンジュ通りへ行くには、エドモン=ロスタン広場から東に向かってスフロ通りの坂を上り、パンテオンの裏手 きた。一家はまず、第六区のド・トゥルノン通り(リュクサンブール庭園北辺のヴォージラール通りの途中から北方 へ延びる通り。 一八八〇年九月、ロマン・ロランの父母は家族を引き連れて、ブルゴーニュ地方のクラムシーをあとにしてパリへ 「その南端は、庭園内にあるリュクサンブール宮[上院議事堂]の裏手に接する)十六番地の狭い住居

有するエルサレムに、 た場所には、そこに宿る聖なる存在が、時代の変転につれて交代してゆくことが多い。三大宗教がひとつの聖地を共 マ人に占領されていた時代には、その頂上にはバッカスを祀る神殿があったらしい。昔から聖地として認められてき 高い岡ではない。いちばん高いところでも標高六○メートルだという。ルテキア(リュテース、パリの古名)がロー よう。都市の地形に関心のある人なら、その丘が古代からつねに聖地でありつづけた所以を感得できるだろう。そう その最大の例を見ることができる。

現在のガランド通り、 この岡の斜面にある。 に学んだルイ=ル=グラン高等中学校にしても、 そしてその岡へは、 モンターニュ=サント=ジュヌヴィエーヴ通り、デカルト通り、ムフタール通りは、古代にリュ 聖地巡礼者ばかりか、ヨーロッパ各地から学徒も集まってきた。ロマン・ロランが若者の時期 聖地巡礼者や学徒が踏み歩いてできた道は、いつしかふつうの人たちの行き交う街道となった。 青春の日々を送ったエコール・ノルマル・シュペリユールにしても

セーヌ川南岸(左岸)に小高い丘がある。スフロ通りの坂道を上りながら、正面にそそり立つパンテオンを見上げ

パンテオンの堂内に入ると、善男善女が昔から聖女へ捧げてきた尊崇の気配に包まれる。まず目を奪うのが、ピュ

ヴィ・ド・シャヴァンヌが才筆をふるった「パリを見守る聖女ジュヌヴィエーヴ」だ。この壁画連作から発散してい 堂建造の遥か以前、すなわち古代からの層々たる時間の堆積の息吹であり、この岡の高みにもともとから漂っ

ていた聖域の気配なのだ。祈る聖女の姿に、それが結晶している。そこにはパリの人たちが聖女に寄せてきた敬慕の

生まれた。じつはパリ西郊のナンテールで富裕な両親(父親はローマ人、母親はギリシア人)のあいだに生まれ、孤 サント=ジュヌヴィエーヴ (聖女ジュヌヴィエーヴ、四二二−五〇二)は、伝説によれば貧しい羊飼いの娘として

児となってからシテ島に住む親類の女のもとに身を寄せていたという。《じつは》と言ったところで、史実と伝説と

の境界は判然としないのだが……。

欲生活を送っていた。四五○年、または四五一年にアッティラ(フン族の王)の軍勢がパリに攻め寄せたとき、パリ 彼女は早くから修道女となり、貧民に奉仕し、病人の看護に務めた。彼女自身は二日に一度、 粗食を取るだけの禁

しないと言い聞かせた。彼女は の住民は恐れをなして避難しようとした。そのとき彼女は、住民たちに恥を知れと言い、フン族をパリに近寄らせは 〈神〉に祈ることで民衆を励まし、その抵抗心を高めさせた。じっさいアッティラは、

フランク人 —— 彼らを率いていたのは、おそらくクロヴィス

(四六六?-五一一) だといわ

パリを避けて通り、

オルレアンの手前まで進出したところで侵攻を阻止された。

三十年後の四八〇年、

・がパリを包囲した。パリの住民は飢えに苦しんだ。そのときジュヌヴィエーヴは、十一艘の小舟を仕立てて、

ば

のは、

クロヴィスが少年で、

両岸とも敵軍の占領下にあるセーヌ川をトロワまで遡り、その地で食糧を積み込んでパリに戻った。一般に知られて

か後世まで、パリの守護の聖女として民衆の心のなかで生きつづけた。九世紀にはノルマンが再三フランスを侵攻し 丘の頂上には、 やがてサント=ジュヌヴィエーヴ修道院が建てられた。伝説の聖女の威信は、 聖女亡きのち、 はる

教会と改称された。パリの住民がこの聖女に寄せた崇敬は強まるばかりだった。

ンガ王朝時代の棺だとも石棺だったともいう。埋葬場所はクロヴィスと同じく聖使徒教会 ―― サン=ピエール=サン=

たが、 災害に襲われるたびに、 囲戦を続けながら、 八八五年の侵攻のさいには、 ついにパリ入城を果たせずに終わった。その後も、敵襲、疫病、 聖遺物箱が担ぎだされて行列が行われた。 彼女の遺骸を納めた聖遺物箱の威力によって、ノルマン人は十三ケ月にわたる包 飢饉、洪水など、パリが各種の

その建立中に大革命が勃発し、 時代がくだって一七五五年、 ルイ十五世の発願で、 聖女の墓所が冒瀆されるような事態ともなった。十九世紀をつうじて、パンテオンは 修道院庭園の西側部分にパンテオンの建設が始まった。

(聖ペトロ=聖パウロ)教会 ――の地下聖堂だった。その後ほどなく、この教会はサント=ジュヌヴィエーヴ — 52 —

がつくだろう。

は、パンテオンのドームから吹きおろす風からでも、そのあたりの消息を聞き取りたくなってくる。 性をはぐくんだ精神の風土はどのようにして形成されたのか。われわれ異邦人でさえ、フランスの旅を重ねるうちに ことだが、ロマン・ロラン自身、庶民ばかりか知的な友人たちを観察してその事実に十分気づいていた。そうした心 わしい側面が根強いのだ。かならずしも科学的教養と相反するわけでもない。『最後の扉の敷居で』を読めばわかる ないか、と考えないわけにいかない。信仰には理詰めで割り切れないところがある。信心という名で呼ぶほうがふさ しれない。しかし、フランス人の心性に思いをひそめると、近代に入ってからも信仰が血のなかに生きていたのでは この岡にまつわる伝説も歴史も、本誌の読者にとっては、 ロマン・ロランとあまり関係がないように思われるかも

路歴史事典』(一九六八年、エディション・ド・ミニュイ社刊)を参照した。 この注釈中、サント=ジュヌヴィエーヴの事績と岡の歴史とについては、主としてジャック・イレーレ著『パリ街

長い注釈で中断されたが、ここで『内面の旅路』本文に戻る。

「――《でも、どうしたら、ぼくは生きていけるの? 神 よ、ぼくはあなたを信じてはいない、 ぼくよ、 ぼ

くはおまえを信じてはいない。》

――《おまえを否定することによって。》

ノンはウイと同じく、生を確言することである。死はどこにあるのか、嘘をつくことにのみ。自分自身に嘘を、、

つくことにのみ。 精神の卑劣さにのみ。

まり勇敢かつ率直でなかったときでさえ、―― わたしは一度として自分を欺こうとはしなかった。一度として、 であれ恐れゆえであれ、生への情熱ゆえであれ生への厭悪のゆえであれ、 あらゆる事情のもとでも、 わたしにとっての救い、 その誠実は絶対的にして恒常的であった。愛ゆえであれ憎しみゆえであれ、 それはすべて、 わたしの内面の誠実から発した。わたしの人生のあらゆる瞬間 ―― 心弱さのために世間にたいしてあ 欲求ゆえ

自分自身に欺かれはしなかった。

魂なしの裳抜けの殻となった肉体をひざまずかせ、口をもぐもぐさせて中身なしのお祈りを唱えることなどでき とはしたくなかった。〈神〉よ、わたしはあなたに向かって率直です!もう、あなたのミサへは参りません。 話は、あとでまたしよう)。わたし自身への、また隠れた は、 わたしはミサがあまりに荘厳なのを知っていますから、 かった。信じているふりをして信者の格好をつけ、表向きを塗り立て、いつまででも決まったお勤めを続けるこ この若者の時期に、 わたしのそれまでの宗教と縁を切ることであった。それはわたしのもっとも宗教的な行為であった。(その わたしは 〈神〉をなくして沈んでいった。わたしがその時期に行った最初の精力的な行為 あなたが血にまみれた生け贄になっておられるまえで、 〈神〉への敬意ゆえに、わたしは見せかけをしたくな

えはわたしを否定などしないだろうに……』」 『信じないとは、 やはり信じていることである!
もしわたしたちが格闘しているのでなかったら、

ません。あなたを信じていないのですから。

その引用には原文と異同がある。 (ド・パイユレ神父は、 資料四十七のロランあての手紙のなかで、 異同を注記するのは煩わしいから、ド・パイユレ神父による引用箇所は 内 面の旅路』 のこの箇所を引用

『内面の旅路』

の原文に揃えてある。

— 54 —

なかに織り込んだのだと考えられる。ロラン自身としては、

神

にもまた、

誠実なるがゆえにあえて

神

と格闘する者を評価してくれるように期待したのではなかろ

彼の思い描く

神

にたいしてと同じく、

キリス

うか

たしを否定などしないだろうに……」)の解釈を試みるとしよう。 "内面の旅路" 自身と《おまえ》との双方、この対峙し、 に出てくる、この 神 のさとし(「もしわたしたちが格闘しているのでなかったら、 格闘する双方を《わたしたち》と呼んでいる。 神〉 は自分を否定する 《おまえ》 神〉 がこのように に向かって、 おまえはわ

言うからには、

彼》

は人間にたいして、〈彼〉と格闘する自由を、また〈彼〉を信じない自由をも認めているのにち

に いでながら、 がいない。さらに一歩進んで言えば、 は理性的で論理的な信仰のほかに、 ついには 筆者のようなキリスト教にたいする局外者から見れば、先に聖女崇拝に関連して暗示したように、 〈彼〉を否定してかかる人間のほうを、 神〉 素朴で素直な信心の伝統も根強く存在しているように思われる。 は、 習慣や惰性から自分を信じているつもりの人間よりも、 対峙するに足る主体的存在として評価しているようだ。

無明 神とさえ格闘する人間としての誇りがあった。 肯んじなかっ Ó 闇に留まるのがこわいという理由から、 彼はそのような選択を、 知的に不誠実なこととして排除したのだ。 それでいて、 論理をわきにのけ、約束されている永遠の生命に賭けるようなことを 彼は不遜でも傲慢でもなかった。 むしろ彼には、 もとより、 天使と格闘 けっして無

しロマン・

ロランは、

あくまでも理性の人として生き抜いた。

論理の階梯を踏みつづけるのを途中でや

神論者ではなかった。それどころか、

母親に見られたような、

素直な信心深い生き方への郷愁があったのだ。

彼が拠っ

てくるように、彼が親しく接した神父たちとの交友のなかで、そのような恨みは薄らいでいたようだ。あとで紹介す る資料五十一からは、 て立った理性にしても、 〈教会〉にたいしては恨みがましい気持ちをもっていたかもしれない。しかし、『最後の扉の敷居で』から伝わっ 彼が心の半面で〈神〉を信じたいと切望していたさまが伝わってくる。 神が人間に与えた準則として受けとめていた。つぎの数行に見られるように、 彼は制度とし

『内面の旅路』から、いまの文言に続く数行を訳しておこう。

なら戻っておいで、というふうであった」。(Le Voyage intérieur, éd. de 1942, p.p. 128-131.) 悪くした。宗教は子どもたちのためになる、と考えていた人たちのひとりだったからである。 「わたしがカトリシスムと縁を切ったために、母は心臓から血の滲む思いをした。父は信者ではないのに気を わたしを〈神〉 の家へ連れ戻すために小指ひとつ動かしもしなかった。別に会いたくもないが、戻ってくる 〈教会〉 は無関心

ある。 ンに接近したかを考えるうえで役に立ちそうだ。ピシャール神父はこう書いている。 資料四十八は、レーモン・ピシャール神父からロマン・ロランに宛てた手紙だ。発信地はル・ソールショワールと セーヌ県の寒村らしい。日付は一九四三年一月九日。この手紙も、 神父たちがどういう動機からロマン・ロラ

次元へ移行させてくださいました。とりわけ、ホセアとエレミヤとを介してです。この二人はいまもなおわたし ろがほとんど時をおかずに、摂理のありようの驚くべき襲来によりまして、〈神〉はわたしを神的な友情という クリストフ』に出会ったのでした。わたしはそこから、人間の友情という大河をごくごくと飲んだのです。 「以前にも申し上げたとおり、わたしは一人っ子で、初めて友情というものを発見したあと、すぐに『ジャン=

寵をもちまして、わたしの かと思ったものです。それというのも、首尾一貫していないという感じがしたからです。今日では、 〈信仰〉が真実なのを確言するためでしたら、前代未聞の歓喜を覚えながら殉教に出 神 の恩

[原文、ラテン語]語りきることができないほどです」。十八歳のとき、わたしはカトリシスムは本物だろう

向きもいたしましょう。先生はあるとき、J・ソリユーにこうお書きになりました。《大河はコップいっぱいで

があの奇跡的な恩寵の攻勢をかけてこられたあいだわたしに教えたもうたことを、

飲めはしない》。

神〉

したから、 手紙のなかに書き尽くすなどということは思いも及びません。—— それはともあれ、親愛なるロマン・ロラン先 先生はというと、 神〉 のためにそのみ業を証言する力がございません。しかし、みこころに適うのであれば、こう説 いまその攻勢期にさしかかっておいでです。 わたしは小説家という天職を授かりませんで

くことにします。

「わたしを信じる者は

[……]その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」

(「聖ヨハネ福音書」 第七章第三十八節)。

月十九日だ。それはロマン・ロランが病気と知って心を痛めて書きしたため、 ミシェル・ド ・パイユレ神父からロマン・ロランあての手紙で、発信地はパリ、 ロマン・ロラン夫人に別の手 日付は

一通の

冬は前年より暖かいので、ご健康にきびしく障らないように」とある。 ンが生まれたのは一九六六年一月二十九日なので、七十七歳の誕生日を迎えるロランへの祝意を述べている。 資料五十は、 ピシャール神父の手紙は例によっていくぶん説教がかっている。 資料四十八と同じく、レーモン・ピシャール神父からロマン・ロランに宛てた手紙だ。 じっさい、いくらかは穏和な冬だったのだろ ロマン・ロラ

した。 の内なる兵士なのでございます。兵士はそれぞれの片隅にいて、自分を導きゆく隊長の計画を知らぬまま、 結ぶにあたって、苦悩はすべて一歩前進のしるしの役をすべきだし、またそのしるしであるべきだ、 勝利を確かなものにしているのに、 仄暗い 神 世界の果てしなき苦悩のなかにあって、各人は、わたしたちを統治しておられる目に見えぬ が先生に、苦悩のただなかでの主の安らぎをお与えくださいますように。 〈信仰〉 に包まれつつ、自分が〈宇宙総体〉の建設に貢献していることを確信しているのであります」。 その勝利を目にしないまま、苦しみ、そして死んでゆきます。 先生は 『魅せられた魂』を 神 と語られ のみ手

六節「わたしたちの魂はすでに時間の外に出ている」の冒頭数行を書き写しておく。 ベ ルナール デュシャトレ著 『あるがままのロマン・ロラン』第六章「ヴェズレー (一九三七年—一九四四年)

第

0 なかでロランはこの年下の友だちにこう書き送っている。「仕事にかかれば、 前節の末尾近く、 ロマン・ロランからルネ・アルコスあての、一九四三年一月七日付の手紙が引用されており、 いつだってまたしゃんとする」。第六

節冒頭はそれを受けている。

— 59 —

守るべき

再発したため、衰弱が甚だしかったのだ。二月三日、パリから医師が来た。別の治療が試みられた。 ている〕から心臓専門医に往診してもらった。ロランは重態の時期にさしかかった。結核と内臓圧迫とが同 そういうことだ。マドレーヌ「ロマン・ロランの妹」が居合わせて、兄を看取った。十四日晩、彼は息が詰 なった。三月初めには、『内面の旅路』の増し刷りの許可がようやく下りたし、『ミケランジェロ』も印刷される 瀕死の状態だったが、すこしずつよくなっていった。 まったのだ。マリーが帰ってきて、オセール[ヴェズレーと同じくヨンヌ県の都市。直線距離で三十五キロあまり離れ そのときマリー[ロマン・ロラン夫人]はパリへ出かけていた。感冒にかかった。すくなくとも、彼が思ったのは 「《いつだってしゃんと》! 「感冒が悪化して気管支炎となり、それに心臓疲労まで加わっていた。からだの調子が体力の限界にきてし 数日後、彼は病気に打ち倒された。一九四三年一月十日から十一日にかけてだ。 厳重な食事療法に従わされた。二月半ばには回復が顕著と 一月末には まりか

資料五十一 ――「わが病中手帳」(抜粋)―― 一九四三年一月-四月

決まりに縛られなくてはならなかった」。

ロランはそうしたことに関心を向けた。立ち直ったものの、回復期はぐずぐずと長引き、

な気がしていた。 医師たちはすでにわたしを見放していた。そしてわたしは、自分が医師たちの指のあいだを垂れ落ちていくよう こともできるはずだ。それというのも、 わたしは向こう岸すれすれのところに来ていた。 以下のページを、 わたしにとってはたいした経験だった。 大いなる 旅 0 遠いところから戻ってきたのだから。十日間ないしは十五日間というも 《舞台稽古》 ある夜など、わたしは死の敷居に触れたとさえ言えそうだ。 とか 《試演会》 しかも、 (《最後から二番目の上演》)とか名づける 熱が高くて最悪だった日々にさえ、

手当たりしだいの物に、 鉛筆でその幻覚を記しておいたこともある)」。

まで来ていた。うわごとと分別のあることばとが混ざり合っていた。一月二十五日から二十六日にかけては形而 最悪だったのは、 一月十九日から二月四日ないしは五日までだった。[……]わたしはしばしば錯乱 のへり

じがした。 ない、という感じがした。そして、衰弱しながら、投げやりな気分になっていた。自分は流れてゆく、という感 を読んだばかりだった)、《ピフ王子》……、レンブラントの描いたイエスの腕……。 上的幻を見たが、そのことはもっと先で話そう。――〈神〉、〈聖処女〉、トロイ戦争の英雄たち(『イーリヤス』 ―― あるいはむしろ、自分から命が流れてゆく、という感じがした。命がわたしから抜きさられてい 医師たちは守ってくれてい

考えていたのだ)。」 こから引き出せるんだ……》。(『ラザロの復活』の版画が寝台の真上に掛かっていたので、わたしはそのことを たのだ。ある夜、 わたしはマリーに言った。――《頭上にいる人が腕を上げさえすればすむ。あの人はぼくをこ

60

あの混濁の日夜に戻る(一月末-二月初め)。

「さて、深淵上に浮かんでいた、

妹 ……落ちてゆく……落ちてゆく感じがする。そしてわたしの寝台のあたりには、ただ二人きり、親愛な女性 がいて、わたしを引き留めようと力を尽くしている。だがわたしは、二人の手から擦り抜けてゆく。

生をかけた仕事と瞑想とを検討しようと。寄りかかれるものがいっさい見つからない。驚くべきことでさ

しがみつけるところを探しているのに、見つからない。わたしの意識を検討しようと努める。

えあるが、これぞという行いなにひとつ、手柄なにひとつ、生きてゆく(それとも生きてきた)理由なにひとつ、

みんな虚無になった。 じっと見定めようとしてもできない。 ジャン=クリストフだって、ベートーヴェンだって、どこにいるんだ。支えてくれる者はだれもいない…… 物の数に入らない。埃だ、手で掴もうとするそばから、粉々になってゆく……」 ――外界すべても、戦争も、社会闘争も、人類の希望も、やはり虚無なのだ。 わたしの作品のどれひとつからも、ごくかすかな思い出さえ浮かんでこな もうなにひ

篤だと伝えた。 に祈ってくれた。ピシャール神父もミサを挙げてくれた。だれか未知の女性がクローデルに電話をかけ、 まオルレアンの修道院に立ち寄っていた。そこでは、神父がロランのためにミサを挙げ、修道女たちが彼といっし とくに思いがけなかったのは、じつに大勢のカトリック信者が唱えてくれた祈りだった。ド・パイユレ神父はたまた していた。二人とも、彼の寝台のそばで寝ていた。それに、ヴィルドラック夫妻やクローデルなど、友だちがいた。 ヌもそうだ。二人はふだんは仲がよいとは言いがたかったが、ロランの病気中は、このあいだだけでも心をひとつに まにも穴へ落ちそうなロマン・ロランをつなぎ止めているものがある。 切れ切れの睡眠しか取れず、一晩に七、八回、彼が呼吸困難に陥るたびに枕元に駆けつけてきた。マドレー クローデルはロランの救いのために熱烈な祈りを捧げた。疎遠な知り合いたちも祈ってくれた。 それは愛情だ。 マリーは、 ロランが危

価値を持っていることを、私は初めて気づいた。 かが苦悩し、 キリストのまわりに魂たちを結集させて、〈父〉 わたしは驚きと感謝とを覚えつつ、この祈りの大波がわたしを持ち上げているのを感じていた。 また試練に逢っているとき、キリスト教 の善意に声をかけるのである。 わたしはその家族に属していたのである。 (カトリック) 共同体の絆が働いて、大い その絆が実体であり、 わたしの二人 なる 共同体のだ

書いている。

この二人ともども、 実在の 〈源泉〉 につながっていたのである」。

言うには、祈りは せ!」とあった。祈る人が捧げる個々の祈りは ることがあった。そのなかにあった、クローデルから送られてきた新しい本に、「主よ、 ちょうどそのころ、 《生死に関わる機能》を有し、すべての人々の魂と〈神〉とのあいだをつなぐ《愛徳の絆》 熱が高く、衰弱が甚だしかったのに、 〈神〉に向かって権利を要求できるのだ、ともあった。 ロランは枕頭に置かれていた何冊かの本のペ 祈り方をお教えくださいま クローデルが ージをめく なのだ。

はすべての人々に心を向けているさいにも《絶えず個々の人々の意志をつうじて働く》というのだ。

う。「それというのも、いかなる取りなしも、イエス自身がおんみずからの血でもって捧げる取りなしほどの価値 え方をする人だ。それでいて、彼はマリーに宛てて、夫の快癒を祈ってミサを挙げてもらうように熱心に説いたとい 同じころ、ド・パイユレ神父のことばがロランのもとに届いた。この神父は宗教儀式にかんしてたいそう自 な考

ありません」と言ってよこしたのだ。

の真剣さに接して、 執拗なこだわりのように見えるかもしれない。 たって、 どっておられる向きもあろう。 『最後の扉の敷居で』は、 ロランはなぜ、 わたしの拙い紹介についてきてくださった方々のうちには、 わたしたちは考え込まざるをえない。 少年時代に別れた 西欧の代表的知識人であるロマン・ロランの精神の軌跡を記録した本だ。ここ数年に なにぶんにも、 神 わたしたちの生きている国の精神の風土は、 をめぐる思索を、晩年にいたっていよいよ深めていったのか。 しかし、 危機的な病状のなかで、 ロランがこの書物に書き記してきた想念にとま ロランは問題の核心に肉薄する。 西欧のそれと本質的に異 それ

ロランはこうして生死の関頭を迷っていたとき、 カトリック信者たちが彼の快癒を願って 神 に祈ってくれてい

さいしての彼の心境がうかがわれるので、つぎの数行にとくに注目していただきたく思う。

がそのなかに吸い込まれる〈存在〉とか。それは精神的に貧困だ。もし〈彼〉と彼らとが非人格的だとしたら、 ことがまるきり見いだせない心にとって、それはなんと慰めになることであろうか。汎神論とか、すべての存在 染みとおり、親しい手を愛情をこめて押しあてられたように心に通ってきた。 うもの、冷え冷えとした汎神論 から力の限りにおいて、その犠牲に加わる信者の共同体。そういう崇高な思想。病者の寄る辺ない何時間かとい たひとりひとりの人への愛ゆえに、一瞬ごとにみずからを犠牲にする〈神〉。また、この犠牲に参与して、 「以上のことがすべて心情の美しい欲求に過ぎないとしても、 ――健康な日々にはそれで十分なのだが ―― のうちには自分の味方をしてくれる それは熱によってからからに乾いた孤独な身に ――人となって、すべての人、ま みず

――数々の自我 ――この限りなく多くの自我に……

なんの関心ももてない。それでは、真の問題をまるきり説明してくれない。真の問題は自我にあるのだから。

造し(永遠に創造し)、保全し、養う〈神〉へと。それは、 ということがあるわけがない。 存と自我とは別個の二つのものである。 ゆくのを感じている。 それゆえ、《存在》という語の本質が十分に明らかにならない。--自我たちは、どのような源泉に由来しているのか。人格的なものが非人格的なものから生まれた、 あるのでなくてはならない。 そして、もしわたしに〈実存〉の、非人格的 〈中心=自我〉 -- こう考えてゆくと、遠いところへ連れていかれる。 ― なぜかというと、わたしはいま、 〈総体としての自我〉 抽象的認識界から、 〈存在〉の源泉が見えるとして、この人格的 いまわたしがしている経験によれ ほかのすべてを包摂し、また養うところ いのちがわたしから退き下がって 愛の暖かい界へ、〈父〉 すなわち、創 ば 実

独立した、並行的な存在を有する。 をずっと拒んできた。 わたしのなかで、 認識 (拒むということばは不正確である。たとえ願っても、 (理性)と愛 これまでのところ、わたしには熱意があるのに、 (心情) とは ―― まっこうから対立しているわけではないが 理性には信じられないのだから。) わたしの理性は信ずること

いうことをきいてしまう。 あますところなく、きみを差しだし

そしてわたしの心情は、存在の別の世界に由来する衝動の、すなわち奥深くて向日的な本能、

直観、

閃光の

クローデルはわたしにこう言う。『きみの精神をへりくだらせたまえ!

その声に耳を塞いだりしたら、不実やペテンになってしまうだろう、そんなことは恥ずかしくてできない。 は忠実なしもべである。あの精神の光、〈主〉がわたしに与えたもうた理性にたいして、わたしには責任がある。 それがどういうお方であるにせよ、〈あのお方〉、わたしの〈父〉であり〈主〉である〈お方〉にとって、わたし たまえ! きみに呼びかける声に従いたまえ!』——そう言われても、わたしにはできないし、そうしたくない。 神 のみ前であろうともそうなのだ。もし〈神〉がわたしにそう望まれるのなら、わたしを説き伏せていただ

— 64 —

れを精神にたいする死にいたる罪とみなすのだ。 きたい!おできになるのだから。しかしわたしは、これまで一度でも嘘をついたことのない理性を、 のままであのお方にお返ししなくてはならない。 ――もしかして理性が嘘をついたことがあるのなら、 手つか 理性はそ

トマス・アクイナス信奉者たちの合理主義は、 認識の木が人間にたいして禁じられたことが真実であるとすれば、つぎのように演繹できるのではなかろ わたしたちのあとについて敷居の向こう側へ越えてゆくことはないのではない 誤った道を進んでいるのではなかろうか。 信仰の目から見る

こうは言えないのであろうか。認識の木の魔術的な、禁じられた果実は、

人間の一生を養いはする。

にして、この認識界全体に蓋が押し被さるだろう、と)」 圏の境界を越えかかっていたのであるから。いまにも《稜線》の向こう側へ移ろうとしていたのであるから。 錯乱の意味ではなかろうか。――わたしは深淵に沈んでいき、空虚と夜の闇とのなかを漂いながら、 それはわれわれにとって死に至る糧である。それはわれわれを支え、 毛にして呪われた宝物のままなのではないか。われわれは地上に生存するあいだはそれで生きている。 れわれと同じく、地球という限界を越えられないまま死んでゆく。それは、高めるとか高まるとか、われわれを うか。すなわち、理性という、この木の果実は、―― 人間に盗まれ、―― そののち人間の手中で、いつまでも不 《稜線》へ運んでゆくとかするようにはできていない。——(これこそ、わたしが一月末に体験したおとなしい わたしはこういうことを知っていたし、感じていた。わたしがこの認識界をあとにするやいなや、 われわれを傲慢にする。しかし、それは 知性の生命 たちまち

以下に、ロランが一月末に《錯乱》を体験したときの幻を紹介する。

いた。 したあとのことだ)。 「一月二十五日から二十六日にかけての夜、――午前三時ごろ。(そのとき、わたしは熱が三十九度を超えて 心臓の専門医が、その日が二度目だったが日中に来てくれて、体力が衰えていることだし、重態だと診断

なかったが、星明かりだった)夜の闇のようななかに、広い見晴らし台が見えた。そこはヴェズレーの高台を思 わせはしたが、まるきり似たところはなかった。その全体が、ぎっしりと敷き詰めたモザイクのパヴィメント わたしの幻は、奇異なほど抽象的かつ具体的、同時にその両方だった。暗いうちにも明るみの漂う(星は見え 舗装」で覆われていた。大理石、 縞瑪瑙、 瑪瑙、 ガラス質の石など、美しい石がモザイクになって

ちの側に引き留め、 えていた きり永遠に失ってしまうのだろう。たちどころに、こういう感じがした。わたしが通り過ぎた直後に、パヴィメ ばかりの世界とを隔てていた糸はもう切れてしまったのだ。そのため、わたしは生者たちの思考との接触をこれ 覚えていたからだ。つまりわたしは、糸ほどの境界線を踏み越えてしまっており、わたしとわたしが立ち去った 足もとでつぎつぎと閉ざされていったのかもしれない。それというのも、 割れ目を通り抜けてそのパヴィメントに入り込んゆき、しかもそれらの透き間は、通り抜けるそばからわたしの ようだ わたしはいまはもう、ごくわずか努力するだけ、同意するだけで死ねるのだろう。 してわたしの脳はいまにも割れそうだった。――夜の闇のなか、いくぶん遠くから、クローデルの笑い声が聞こ ントの抜け道は足もとで閉ざされてゆき、なにもかもつるつると硬く、透き間なしの状態に戻ることだろう。そ りながら抽象的な様相が見えていた。そこは通常の知的認識が存する地帯の上方にあったのだ。それにわたしは、 どういうぐあいに、それを見ていたのだろうか。わたしはまるで、谷間の上空に、 ――あの《稜線》に上ったような気分だった。――わたしには、その (すでに知性の向こう側へ通過してしまった者の笑い声だった)。——わたしは確信しているのだが、 呼び戻したのは、なんだったのだろうか。 わたしはのけぞって、 わたしはこういうことを悟って不安を 《稜線》の、 ―― わたしをいまだに生者た 仰向けに倒れなくてはなら わきに寄って浮かんでい 同時に現実のものであ

鉛筆で書きつけておいた。 クとともにアナル派の創始者]による『十六世紀における不信仰の問題』[一九四二年刊]であった。 ロランはその翌朝、 幻がまだはっきり残っているうちに、寝床に置いてあった本の末尾の白紙のペ その本は、リュシヤン・フェーヴル[一八七八-一九五六、フランスの歴史家、

わたしは、だしぬけに目覚めた [……]」。

幻の記述は以下のように締め括られている。「そしてその日の日中、 ブリュックベルジェ神父[レーモン=レオポル

ド・ブリュックベルジェ神父、『稜線』(一九四二年刊)のほかにイエス伝などの著作がある]の書物に記されて、 わたしの幻

境界線に立っているのを感知しながら、それを指し示す的確な表現を思いついていなかったのではなかろうか。そし て数時間後、 の正確な題名が届いた。 さいごに書き加えられた以上の三行はなんとも不思議な感じがする。ロランは幻を見ていたときには、 昼間になって、ブリュックベルジェ神父の本が届いた。その題名に『稜線』とあった。彼はたちまち、 ---《稜線》というのだ」。 自分がある

— 67 —

(成蹊大学名誉教授・仏文学)

夢のお告げと取るのは大袈裟だろうが、偶然と言っただけで切りすてたくないような気分が尾を引く。

その本がまだ届かないうちに、すでに幻のなかで《稜線》を体験していたのだった。予知夢のひとつと言いたくなる。

《稜線》という用語こそ、自分が夢幻のなかで越えかかった境界線の名としてふさわしい、と悟ったのだろう。彼は

新理事長ごあいさつ

口 マン・ロラン研究所と私

のはどうも気が進まず面映い気もする。 しまった。 なったが、これということができないままに日が過ぎて 昨 年からロマン・ 本職としている理系以外のことでご挨拶する ロラン研究所理事長を務めることに

雷(フー・レイ)について榎本泰子先生からご講演いた 敬愛し、 る講演会が開催され、 昨年は尾埜善司前理事長の講演会があり、 傾倒されてこられたロランに対する想いが伝わ 中国におけるロランの紹介者・傅 尾埜先生が

だいた。

ンポジウムの日程に合わせた日本のロマン・ロラン研究

また、昨年はフランスでのロラン関係の国際シ

ヴェズレーの大聖堂での神谷郁代先生のベートー

ロランゆかりの地をめぐる旅にも多くの人が参

所企画の

会なども開催しているので是非ご参加いただきたい。こ に終わった。 ヴェンのピアノ演奏、宮本正清の詩の朗読なども成功裏 当研究所では講演会のほかに朗読会、

西

成

勝

好

ので、ご覧戴きたい。

私がロマン・ロラン研究所と関わるようになっ

たのは

れらの活動についてはホームページに詳しい紹介がある

多い。 いわゆる権威というものに惑わされず、 系の仕事をしているが、 紙などの整理のお手伝いをして、 三〇年前にパリでロマン・ロラン夫人の蔵書・書類・手 にお手紙を書いてからである。 科学と芸術には共通するところがあって、 ロランを愛する読者は理系にも 私はどちらかと言えば理 帰国してから宮本先生 真理にのみ忠実 それは

であろうとする態度を保とうとすることではないかと思 ロランの主な著作『ジャン・クリストフ』『魅せら の面だけではなく、 い」とド・ジェンヌは言う。

時の日記』からうかがえるのは、 てもそれに流されずに、 れたる魂』『ベートーヴェン 正しいと信じたことを貫こうと 偉大な創造の時期』『戦 世の中の大勢が間違っ である。 かけている。

するかというだけではなく、 るかという社会の大局的な動きに対して如何なる行動を 日常の自分の仕事に対する

する真摯な態度である。

それは戦争に賛成するか反対す

後、

偉大な友ド・ジェンヌ先生は

「われわれはバカンスの

態度にも反映されるものと思われる。 フランスの科学者は科学者である前に市民であると言

会でド・ジェンヌ先生(ノーベル物理学賞受賞者) われた。 私が関わったロマン・ロラン研究所主催の講演 はプ

リーモ・レーヴィについて語られた(『ユニテ』三十一号、 一〇〇四・四)。彼がプリモ・レーヴィを愛する一つの理

由は、 仕事をしている人間の人知れぬ努力を描くことはあまり に頑張って社会で仕事をしているかを語っているからで 世の中 アウシュビッツから生還して、化学者としていか に貢献している科学と技術について、その

ない。

「プリモ・レーヴィがそういうことをしたのは偉

インドの独立を勝ち取ったのだから、

これほど偉大

険』講談社ブルーバックス、 彼はそのことを Les objets fragiles『科学は冒 その陰 (負 の中で若い読者たちに語 の面を百も承知の上で

もちろん科学技術の光

正

まことに尤もな話である。 毎日充実した時間を持てずに、

リフレッシュして良い仕事が出来る」と言われた。

ということも有ろう。 ても、気持ちにゆとりがなければ大したことはできない 心がすさんでくることもあろう。科学にしても芸術にし 緊急に要求されたことに応える仕事だけをしていると、 昨年、森本達雄先生がガンジーの思想を分かりやすく

ごい。 書かれたご著書を拝読して、 ンポジウムのときにデュシャトレ先生に 大さを再発見した。 三年前にフランスで開催されたロランに関する 切暴力に拠らずに英国の植民地主義者を追い出 今更ながらにガンジーの偉 ガンジー は す

— 69 —

生は である。 かった」と言われたが、 え・行動についても同じ疑問が生じる。デュシャトレ先 6 なことはない。どうしてこのような考え方・行動が広ま 「ロランの場合、 のか?」とお訊きしたことがあった。 しかし、残念なことに暗殺されてしまった。 力が伴わず、現実を動かしきれな ガンジーの場合には勝利したの ロランの考 ノー

ように微力ながら頑張りたいと思う。 る。これらの先輩たちの数分の一でも良い仕事が出来る (大阪市立大学名誉教授) の ノーベル賞受賞に

ものを感じる。

大阪市立大学は昨

年の南部

陽

郎先生 て

西成勝好氏 プロフィル

学博士。農林水産省食品総合研究所研究員を経て、大阪市立 同定年退官後特任教授。英国グリンド

中、韓、 ル大学、上海交通大学客員教授。仏、 大学生活科学部教授。 カナダ、ブラジルなどの大学研究所などで講義、 独 伊、 露、 英、米、 玉

際会議を主催。日本食品科学工学会副会長、

日本レオロジー

在り、うらやましいことである。大阪にはいくつ公園が

を見て、英国の懐の深さに感心したことを思い出す。 あるのか?)の中心にガンジーの銅像が鎮座しているの

今年もなんだか厳しい年になりそうであるが、一刻も

与えられなかったのか、さっぱり分からない。それでも、

ロンドンのある公園(ロンドンにもパリにも公園が沢山

ベル平和賞などというものが有るのに、

何故ガンジーに

九四二年生まれ。東京大学教養学部基礎科学科卒業。

理

ク・バドス著『科学は冒険!』、 学会前会長。文部科学省の委員など役職多数。 エール・チュイリエ著 編著書·訳書 ピエール=ジル・ド・ジェンヌ、ジャッ 『反=科学史』新評論、 講談社ブルーバックス、ピ 『食感創造ハ 研究業績、 論

市立大学に奉職することになったことに何か因縁めいた そして魯迅の翻訳で知られる増田渉先生が在職した大阪 祈りたい。 が訪れて、

それにしても、

ロランの翻訳で知られる宮本正清先生、

ンドブック』など多数

早く中東地域その他の各地の戦争が終わり、

世界に平和

不況を脱して、少しでも明るい年になるよう

— 70 —

口 マ ン • ロラン国際平和シンポジウム 二〇〇八

報告

第一次世界大戦終結九○年記念

ロマン・ロランの足跡を訪ねて

宮 本 ヱイ子

はじめに

ております。終えてなお豊潤な余韻に浸りながらこのレポートを書いヴェズレーで聴く神谷郁代のベートーヴェン ――の旅をランの足跡を訪ねて」―― ロランゆかりの地 世界遺産

シンポジウムにあわせて企画・実施した「ロマン・ロ

で日本人ピアニストによるロランが愛したベートーヴェで日本人ピアニストによるロランが愛したベートーヴェではどんな形で参加できるか、何を訴えることが出来るのか、そして出来るだけ多くの方に参加していただくたのか、そして出来るだけ多くの方に参加していただくたのか、そして出来るだけ多くの方に参加していただくたのか、そして出来るだけ多くの方に参加していただくたのか、そして出来るだけ多くの方に参加していただくためにはどうすればいいか。主催者の会長と何度もメールが、よっによりでは、

ジョワ・マリチヌ)からシンポジウムへの参加の熱い呼

主催者ロマン・

ロラン協会(本部フランス

会長リエ

マルでシッシュ・ディディエ氏が「日本におけるロマン・

ロラン受容史」を発表した時、

宮本正清のそれが反響を

読ということになったのです。

数年前、

エコール・ノル

生に、 呼んでいたことが……。 仏語はリエジョワ会長の知人の舞台俳優にお願 日本語は前理事長の尾埜善司先 1)

刻と決まりました。 することになり、 日程もピアノ演奏とともに十月四 それに焦点を合わせて旅日程を十月 1日夕

二日から九日までの八日間とし、誰でも馴染みやすい

般観光とロランの足跡を織り交ぜたスケジュールを組み ました。 風光明媚な世界遺産の聖地ヴェズレーというこ

私以外はロランの生誕地クラムシーも終焉地ヴェズレー とでご参加いただいた方も多数あったかと思われます。

眠っている墓地などの訪問はツアーに盛り込み、 もはじめての方ばかりでしたので、 ロランの家、 永遠に かつロ

ランが過ごしたスイス、 ヴィルヌーヴへ足をのばす十一

 \mathbf{H} (ロマン・ロランに捧げる日々 間 のオプション旅程も選択肢として提供しました。 に参加するのは完全に自由といたしました。 展覧会、 シンポジウ

十六人の参加者、

添乗員入れて二十七人、

ほか個別に二

楽しめる手はずになっています。

と添乗員泣かせの気ままな旅でしょう。 含めツアー本体で七派の帰 人の参加者、 現地からも六人程ありました。 国グル ープにわか 延泊コ れ 1 ス

私の報告は重複しないつもりで綴らせていただきます。 の参加者から寄稿文をお寄せいただくことになりました。 お陰で旅の印象も素晴らしく、 ロラン関係のほとんど

マン・ ロランに捧げる日

〈催し〉

はクラムシー、

ヴ

ェズレ

1

をはじめ隣

の 町

ァ

そしてフランス外務省の後援や共催による町を挙げての ヴ ァロン、これらの町々や日本流にいえば県、 地方連合

ン研究所も協賛者に名を連ねております。 一大イベントでした。遠くは私たちの京都ロマン・ロ 電信柱も自

販売機も見当たらない小さな町のあちこちにロランのポ スターやチラシが踊っています。 メインのシンポジウム

で役所主催歓迎レセプションも用意され和やかな会話 ラムシーで次の催しがありました。 に先立つ前前日からの二日間 は、 隣の町アヴァロンとク それぞれ夕刻、

敵対者たち

十月二日 *講演と朗読

「ローザ・ルクセンブルグとその周辺」

映画上映

スタンレー・キューブリック

「勝利への道」 作品 討論会

*音楽と文学 ロランの戯曲『7月14日』

十月三日

の音楽、作曲はジャック・イベール、

ジョルジュ・オーリックなどの七人組

アヴァロン音楽院の教授と学生た

ちによる

△展覧会 〈戦争の閃光〉 同時開催

クラムシー ロマン・ロラン芸術・歴史博物館にて

十月三日 *ロマン・ロラン記念室の展示説明と

講演「平和主義者の歩み」

ベルナール・デュシャトレ教授による

ヴェズレー

十月四日、五日〈ロマン・ロラン、平和主義たちと △展覧会 ジュール・ロワ記念館

> スターなど、反戦論者や敵対する愛国論者たちの百数十 ロランの第一次世界大戦中の反戦活動を示す書籍、ポ

不許可となった初版本。《解放者》協同作業所で印刷さ 第一番目の展示本は、『戦いを超えて』のフランスで *(注)

ちが手にしているのは後の《オランドルフ社》(一九一

れたが、仏で検閲を受け、カットされた幻の原本。私た

五)版。展示作成者はクラムシーの公立図書館の司書た

ち。シンポジウム以降はクラムシーの図書館で十二月二

十日まで展示。カタログは二○○九年発行予定。

シンポジウム

はもとよりスイス、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、 クリストフ・センターで平和をテーマにして、フランス ラン邸の前庭にロラン夫人が建設した青年の家、ジャン・

〈シンポジウム〉は十月四日、五日、ヴェズレーのロ

卜 インドからロラン研究者、歴史の専門家、 作家、芸術家などが集いました。 ジャーナリス

中の反ファシズム運動へ至る現代史に刻まれたロランの 第一次世界大戦時の反戦アピールから第二次世界大戦

足跡を検証、考察しました。『戦いを超えて』の反戦論

者ロラン、さまざまな要素を持つ人間ロラン、その周辺

が活溌に議論されました。座長はブレスト大学名誉教授

シャトレ氏。開会の辞はパリ大学学長モーリス・ケネ氏 で最もロラン研究で業績をあげているベルナール・デュ

が宣言してスタートしました。 朝の九時から夕方の六時頃まで近くのレストランでの

たちの発表題目十八。隙間なくぎっしり詰まった箱のな 昼食をはさんで丸二日間、 かに居合わせるような息もつけぬものがありました。 持ち時間三○分のパネリスト 地

名程で延べにするとその倍ということになりましょう。

元の関係者も含め参加者はセンターを埋め尽くす一二〇

発表の主要タイトルを記しておきます。

マン・ロラン、『戦いを超えて』のまっただ中で 反戦主義の社会的・政治的評価

> ジャン・クリストフは反戦主義の英雄か? シモーヌ・ヴェイユとロマン・ロラン 大戦と向

き合って

られるか? ロランの反戦思想、 ヒュー マニズムは戦時下に耐 え

ロマン・ロランとシュテファン・ツヴァイク

往復

書簡、ヨーロッパというその信念

*戦時下のロマン・ロランと地元の人々 (一九一

四

一九三九) やっかいな関係

* ロマン・ロランの戦争文学、作品における主人公 ロマン・ロランとカリダス・ナーグ 往復書簡

* ロマン・ロランの亡霊

及び兵士の人物像

シャトレ氏の研究発表で、その一部をご紹介しましょう。 シンポジウムの締めくくりは座長 ベ ルナール

「第二次世界大戦と向き合って」

ロランの一九四○年の日記三○○頁に及ぶ手書き原稿

を入念に調査し、それに基づいてロランが実際どのよう

いった。 に第二次世界大戦と向き合ったか、その反応を検証して 日記の記述とその背景はデュシャトレ氏自身の

編・著作ですでに発表している。

日記は二〇〇五年解禁

になり公開されている。 氏はまず第一次大戦中と第二次大戦との比較を試みて

第一次大戦と第一 一次大戦の相違点 いる。

四十八歳 戦争に反対 壮年 七十四歳 一九四〇 老年 ファシズムに反対 健康悪化

年

船 四

九一

醒めている

活力旺盛

中立国 フランス 人生のアウトサイダー 戦争当事国

家族 フランス 家族 ソ連 情 居住地

報

多い

ほとんどなし

スイス

記 動 質 自由 公的発言 沈默 個人的つぶやき

 \mathbb{H} 言 人

> 家族がフランスにいたが、 部にあって、ドイツ、オーストリア、 反対のアピールをすることが出来た。 後モスクワにはロランと再婚(一九三四年)したマリー・ ス、フランスからあらゆる情報は集まり、父母をはじめ 自由な言動が許された。その ベルギー、 中立国で戦いの外

イギリ

クーダチェフ夫人の息子セルジュが居り、 が容赦なく繰り返されている。 ている状況。スターリン体制下粛清の嵐、 ロランはもっと厳しい『戦いを超えて』を書きたかった 一九三九年九月、 残忍な仕打ち 人質が取られ ・十月に

感が噴出した。たとえ間違いだったとしても、 けれども人質の安否が気ずかわれ諦めざるを得なかった。 老齢で健康が害されている身体、 スとは違う専制独裁、 おぞましいスターリン体制に嫌悪 自由な人権の国フラン そのこと

れていた。 を叫びたくても、 沈黙せざるを得ない厳しい状況に置か

以上のことを踏まえて第二次大戦について考察すべき

だろう。

ロランは第一次世界大戦では 『戦いを超えて』の戦争

九四

○年の日記

のなかで私的な訪問客についての

— 75 —

記述がある。日本の改造社社長の訪問も含まれている。

四月八日、同二十七日 A・シャトーブリアン 四月三日 ベルギー エリザベート女王 一○頁

三頁半、二頁半

四月三十日 山本実彦 日本のジャーナリスト四月十四日 P・クローデル 二四頁

三頁半

つづいて電撃的ドイツのノルウエー、デンマークへの

火車:

ない。この息苦しさは尋常ではない。外界と連絡が取れ一九四〇年の六月二十一日の日記 、ニュースは入らそしてフランスの敗北、ブランス降伏に落胆した。

ない。ラジオ、新聞、

訪問客、すべて激減してい

きない。一九三九年初頭の日記には Francis Jourdain や活動の時期は過ぎ去ったと自覚。一九三八年来同意でや活動の時期は過ぎ去ったと自覚。一九三八年来同意でいった。ロラン自身、我が身が案じられる老体で今戦いは単なる仏独の戦いではなくなり世界規模に拡大

一九三八年 *(±) の長い手紙を添付。

一九三九年 独ソ不可侵条約

てはじめてヨーロッパの平和が来ると信じたロランは、ロッパの状況は善くなるはずがない、ナチスが粉砕されい、ヒットラーと戦うことのみぞ、ナチスがいる限りヨーい、ヒットラーと戦うことのみぞ、ナチスがいる限りヨーヒットラーを倒さねば、粉砕しなければヨーロッパにヒットラーを倒さねば、粉砕しなければヨーロッパに

和を」から「戦争によって平和を」に転化した。最終的にロランは戦争を受け入れる。「革命によって平「ナチスを粉砕せよ」そのための戦争なら仕方がない。

にとるようになった。ソ連とナチスの不可侵条約はロラか、最初の五〇頁は一月、二月、シャトーブリアンにクについて、戦争はほとんど見えない。二月、ロランはソ連に対して嫌悪感に苛まれる。ロランはソ連共産党にグルで、ロランはスタンダールを再読。分析。シャトーブリアンにで、戦争はほとんど見えない。二月、ロランはファンにで、戦争はほとんど見えない。二月、ロランはブリアンに対して嫌悪感に苛まれる。ロランはソ連共産党に対して、フランス共産党に対しても反対する立場を明確があるようになった。ソ連とナチスの不可侵条約はロランにとるようになった。ソ連とナチスの不可侵条約はロラーにとるようになった。ソ連とナチスの不可侵条約はロラーにとるようになった。

ンに衝撃であったに違いない。こうして希望の星であっ

た革命、 ソ連に幻滅しその実体を認識する トレーズに手紙。

ヒットラーを激しく非難していたロランであったがペタ フランスの共産党 開戦前、ナチス

ンとヒットラーが手を結んでもたらされた平和について

容認している。ドイツ人は皆ナチスというわけではない。 考える。そのナチスと妥協して樹立した政府をロランが

そこからもたらされる平和とは?

解したフランスとドイツ国民の友情がヨーロッパに救済 ない。政府が手を結ぶのであれば平和も来るだろう。 ナチスは政府であり、すべての国民民衆というのでは ナチスと妥協したヴィッシー政府に対してロランは、 和

下す。

ロランは数ケ月(七月-十二月)間でもそのことをひ

をもたらすであろう」。

するように会場にどよめきが起きた。 そかに思っていたと誰が想像するであろうか? 対してレジスタンス運動が地下で起きた。 デュシャトレ氏のその発言に及ぶと、氏の思いに呼応 ヴィッシー 当然ながらロ 政 一府に

ランは非合法なレジスタンス運動家と接触していること

ヴ

・エンに帰依したような人生を終える。

はよく知られている。

のような内心を吐露し綴っていたのである。 言っていたものだが、 ロラン夫人は晩年の日記は爆弾が仕掛けてあるとよく ロランは公言を避けながら実際こ

「ロランの過ちだ、ロランも疲労困憊耄碌 した 様 予期せぬ日記の記述に驚きを隠せない。

私たちにも

実よりも未来を、宗教的直感で希望をそこに託し判断 か、 な意見があった。私たちは過去を振り返って正しかった 間違いだったかを判断できる。しかし、 ロランは現

くなる前年(一九四三)に完成のもので、 著『ベェートーヴェン研究』は生涯の最後の出版物、亡 ヴェンがロランの精神生活を満たしたのである。 ンだった。新約聖書とシェークスピア、加えてベートー いた。救いとなる心の平穏を得られるのはべ 結局、 晩年のロランは政治を嫌い社会生活に距離をお 真にベートー あの大 ヴェ

わたしのむすび

先生たちが心から要請されたからでした。 てお引き受け下さったのは、フランスからデュシャトレ 口 グラム。 神谷郁代先生の日本リサイタルでは到底あり得ないプ ロランが体験し愛したベートーヴェンをあえ プログラムと

ţ

()

らいつまでも絶賛と感謝の気持が示され続けることでしょ して受け入れて下さった神谷先生に対し、フランス側か

今回のシンポジウムには新しいロラン像の発見があり 聖堂でのあのときの至福の音楽に。

ました。

相矛盾する要素が複雑に交差しながらそれをう

ち消すことなくハーモニーに満ちた美しい音楽を彼自身

がある、 大な眺めがある、それは大空だ、大空よりも壮大な眺め 奏でた人生。生きた人間ロマン・ロランの魂の深遠性と 人間性に私は敬愛を深めていきます。「……海よりも壮 それは人間 の魂の内部だ。 ·····」(---ヴィクト

イク模様だ」と。 私は会長に「今回の結論は?」と愚問を呈すと「モザ

ル・ユゴーから

豊かな、 私の頭にすぐ過ぎったのは あやまちも多い、また、 私たちの究極の真理である精神の調和に達しようと 長いひとつの生涯 真理に到達できないとして 「よろこびにも苦しみにも -矛盾をも免れ

協和音のなかの協和音」のベートーヴェン的インパクト。 力する。『魅せられたる魂』の序文のごとくロマン・ロ たとえ過ちがあっても精神の調和に到達しようと常に努

つねに努力する……」でした。「善も悪も拡大する」「不

歴史が判断を下すでしょうが、平和主義者、 ランは生涯を誠実に生きたのでした。過ちか判断ミスか、

りの人間でありました。 送りたいと思います。 の人間だからこそ反戦平和を唱え得たロランにエールを ロボットのような機械ではなく、 ストのロランをうち消すものではなく、過ちのある生身 反戦、 アンネット・リヴィエール、 平和二文字だけ入力された ロランこそ生きたひと

 $\widehat{\mathbb{H}}$ 前進する生命……死んでもなお前進する。 は 海に向かって流れる……停滞することのない…… 作者ロマン・

実乖離と非難されようと誠心無垢で真に雄々しく今日 ロランこそアンネット・リヴィエールであり、 たとえ現

ヒューマニ

ら心配していた」と涙を流さんばかりの表情で抱き入れ

訪 れた時と違って、 クラムシーのロラン生家も母

な 方の実家もすでに無く、 ロマン・ロラン芸術・歴史博物館として、二〇〇五年 それらはすべて統合され近代的

にリニューアルされ、完成されました。

的なご夫婦デルボー夫妻、そしてミドン氏も今は亡く、 前 回ホストファミリーとして迎え入れて下さった中心

温かい友情を示して下さいました。ロランの墓地のある 息子のミシェルが、また夫人のミドン夫人が変わらない

掛けて村の公的行事としてもてなして下さった氏も逝か ・ヴの村長さんのナルチュス氏、三色旗のたすきを

れて、 かけてくれました。 今回はその夫人とお嬢様が優しいほほえみを投げ

ツアー ·暮れなずむ夕陽を浴びて遅れて到着しました。 十月三日、 有志は、 個人的にいうと私の誕生日ですが、 歓迎レセプション会場のクラムシ

会場は ・一庁舎 私たち

到着は ぎっしり詰って、ざわめきのなか私たち東洋人の遅刻の ・エジ 3 かなり目立っていました。 ワが人々の間をぬって「あなたたちが来ないか 主催者の会長マダム・

IJ

こそはロマン・ロランが求め、 う血肉の温かい繋がりを感じ支えあう精神の一致、 失って失意のなかで大仕事を果たしていられるデュシャ 感、この気持はどこから来るのでしょうか。 てくれました。 人種も性別も年齢も超えていま生きている人々が抱きあ トレ先生、つぎつぎと親しい方々との出会いに、 ふるさとへ帰ったような懐かしさと安堵 与えてくれた一番大切な 奥様を昨年 国籍も これ

贈り物、 緑深いヴィルヌーヴのヴィラ・オルガの上手の林を貫 ひとつの呼吸が出来るユニテでありましょう。

若い所有者はロマン・ロラン協会の会員になってくれる ま 通する高速道路は興ざめでしたがヴィラ・ 〈史跡ロマン・ロランの家〉と記されていますが、

そうです。 うれしい便りではないですか。

きながら、 は完全にお伝えできず、 最後になりましたが、 この度のシンポジウムに対して賜りました協 不十分なご報告をお許し デュシャトレ 氏の講演につい ただ

賛者の温かいご協力に理事長はじめ役員一同

心からの感

オル

ガは、

謝を申し上げます。 九十四頁に芳名を掲載させていただ

きます。

ありがとうございました。

傍線

注

*第一番目の展示本

アメデ・デュノワ(Amédée Dunois)(一八七八-一九四

五、社会・共産主義者。)がフランスで出版許可を願い出た

が不許可。この冊子の販売と収益はジュネーブの国際戦時

この件をロランは「母への手紙」でも知らせ

ている。

俘虜事務所。

B・デュシャト レ氏編・著作 [Romain Rolland tel

qu'en lui-même], [Claudel-Rolland: une Amitie perdue retouvée_

アルフォンス・ド・シャトーブリアン (Alphonse de

得したが、一九三三年以後の作品には政治意識のみ目立つ。 品でゴンクール賞。『荒地』ではアカデミー小説大賞を獲 Chateaubriant)(一八七七-一九五一)ロランの長年の友人。 小説家。ルソー、スピノザを愛し、地方生活を描いた作

九三五年ヒットラーと会見。

右翼の領袖として親ナチ政

五一一九五八

を発行(一九四〇)、ヴィッシー政府に協力。 策に活躍し、占領下に対独協力紙「ジェルブ」(La Gerbe) 戦後戦争犯

罪に問われドイツに逃亡。

*山本実彦(一八八五-一九五二)新聞雑誌経営者。 改造社を興して『改造』を創刊。 高田博厚も同行。そ 一九一九

の時同道した落合孝幸さんが「ユニテ」二十三号(一九九

六)で紹介。

フランス降伏

デンマークを占領、つづいてオランダ、ベルギー、ルクセ ドイツは一九四〇年五月 電撃作戦をもってノルウェー、

ンブルグを席巻し、マジノ線を突破してフランス国内に攻

見て、南進政策の拠点として仏領インドシナに軍事進駐を 戦意を失って降伏した。(六月十七日) ヴィッシー政権が 成立してドイツと協力(七月)、日本はフランスの降伏を いつめられかろうじて撤退した。(六月四日) フランスは め込んだ。フランスに送られていた英軍はダンケルクに追

·フランシス・ジュールダン (Francis Jourdain) (一八七 行い

(九月)、

日・独・伊三国軍事同盟が成立

装飾家であったが、一九三八年後作家、 レジスタ

ンス運動では「国民戦線」Front National の指導メンバ

社会的、正義心と、 博識に富んでいる。

として活躍。

戦後は美術評論、

エッセーなど発表。作品は

一九五七年五月第十四号「ユニテ」に彼の「ロマン・ロ

ランの青春時代」を収録

*ミュンヘン会談、協定 一九三八年

オーストリア併合に英・仏からなんの抵抗もなかったこ

とで、ヒットラーはチェコスロバキア侵略を企む。チェコ、

ズデーテン地方の割譲要求。英首相チェンバレンと仏首相

ことミュンヘンで会談し(一九三八/九月)英・仏・独

ダラディエはチェコ代表を入れずヒットラー、

ムッソリー

相互の不戦を宣言、ドイツの最後の領土的要求というズデー

パの平和を救ったと歓迎、その平和は小国の犠牲によるつ レンが英に帰国すると、イギリスの新聞は、 テン割譲を承認してそれをチェコに押しつけた。チェンバ 彼がヨーロ

当面の要求を受け入れることによって、その侵略の鉾先を

る宥和政策のピークをなすもので、

真の目的は、

ドイツの

かの間の平和。ミュンヘン協定は英・仏側のドイツに対す

東方、つまりソ連に向けさせて、自分たちは戦争の圏外に

立つためのものであった。ミュンヘンでヒットラーは要求

ア全土を制圧。イタリアもこれを見て翌月、アルバニアを ンヘンの合意にも関わらず一九三九年三月チェコスロバキ 見抜いて、その翌月にはポーランドに対して、さらにミュ が全面的に通るとは考えていなかったが、英・仏の弱腰を

併合。ミュンヘン協定は事実上第二次大戦へのゴーサイン であった。

宥和政策の目指すところは独・ソの衝突であったが、ソ

*独ソ不可侵条約

一九三九年

察して、外交政策を転換。一九三九年八月突如として独・ 連は英・仏側にソ連とともにドイツと戦う気がないことを ソ不可侵条約を締結。独・ソの衝突は回避。これはドイツ

側から見れば対ソ戦の前に、第一次世界大戦の英・仏への

復讐のため、一時的対ソ妥協を望んでソ連に働きかけた。 ソ連を無視して開かれた英・仏側の宥和政策へのソ連側の

ていたフランスなどの西洋諸国の共産党にも大きな混乱を 対応の結果がこの条約であった。反ファシズム運動を進め

引き起こした。同条約は世界中を驚愕させ、特にドイツと

の防共協定を対ソ軍事同盟へと発展させることを考えてい

た日本にとって「欧州情勢は不可解」として平沼内閣が総

辞職するほどの衝撃であった。

ジャン・リシャール・ブロック

(一八八七—一九四七)

作家。トルストイ、ワーグナーに影響を受ける。一九一

○年以来ロランと親交を結ぶ。ウーロップ誌で評論活動

九三七年共産党入党、反ファシズム運動に身を挺し、 演

ではソ連へ亡命して、モスクワからラジオで祖国へ呼びか 劇と音楽を愛し詩作、劇作にも没頭した。第二次世界大戦

けた。『裏切られたフランスから武装されたフランスへ』

(一九四九)を残すなど、多方面の活動によりロランから

アラゴンへの道の架け橋になった。

トレーズ M. Thorez(一九〇〇-一九六四

からなる人民戦線を提唱、 め社会共和連盟を創設(一九三五)して、共産党、 国民投票で勝利、ブルム首班の 社会党

フランス共産党指導者、ファシズムの危険を克服するた

*ペタン元帥 人民戦線内閣(一九三六-一九三七)ができた。 Philippe Pétain(一八五六-一九五一)

> 政権樹立(一九四四・八)後、 軍人、政治家。パリ解放後、 ナチス協力者として死刑判 レジスタンスとドゴールが

決を受けるが恩赦で終身刑

レジスタンス運動

Jean Richard Bloch

第二次大戦中の対独抵抗運動。一九四○年フランスがド

統領ドゴールはイギリスに亡命して国民にレジスタンス運 イツ軍に占領され、七月にヴィッシー政権が成立。 後の大

動を呼びかけた。

史』(法律文化社)、『世界史百科』(平凡社) など。 参照は『フランス文学事典』(白水社)、『現代人の西洋

注

ロマン・ロランの足跡を訪ねて

(フランス)

西尾順子

〝極東〟に位置する日本の青年達とロランとは親身な

交流があった。

と言うことが許されるものと思う。その関係は、わたしの年齢と愛情からみて、父親のような

で次のような内容の助言をしたそうだ。ンスへ学びに行こうとする片山敏彦や上田秋夫に、手紙ンスへ学びに行こうとする片山敏彦や上田秋夫に、手紙と、倉田百三の『出家とその弟子』の仏訳の序に書かれ

ること ――パリのノートルダム大聖堂やサント・シャペル、ロランに会う前に、パリやパリの近くのゴシック寺院を訪れ

紀も前に造られ、戦火をもくぐり抜け、修復を重ねた建美術館や博物館の展示をただ見学するのではない。何世

できたらシャルトルやアミアンの大聖堂も是非見ること。

とによって、教会がヨーロッパの多くの人々の精神生活物の中に身を置き、頭上に輝くステンドグラスを仰ぐこ

する今ごろになって、「ああ、そういう旅だったのだ」このことを私は現地に行ってから四カ月にもなろうと

いだ。もう一度同じコースをたどりたいという気持ちがヴィルヌーブ→パリと巡った旅の豊かさに目もくらむ思と気づかされる鈍さである。シャルトル→ヴェズレー→

二〇〇八年十月にロマン・ロランゆかりの地を訪抑えられないでいる。

についてごくわずかでも)すればよかったのに、雑事に私は参加を決めた。事前に少し準備(ロランやフランス

旅が計画されていると知り、又とないチャンスと喜んで

ねる

意味や目的など何も考えていなかった。

紛れて心がざわついたまま飛行機に乗った。

本当に旅の

ェズレーまでのバ 十月三日午後、 シャル スの旅が始まってすぐに、 トルから約二五〇キロを隔てた 尾埜先生

の姿」と題して、ロランの足跡をたどる旅行の基礎 知識

がレクチャーをしてくださった。「ロマン・ロランの

真

方に入った。

ワインで有名な土地だ。高速道路を下りて

さや豊かさを思い知らされているうちにブルゴ

ーニュ地

を与えるものだった。 若い頃から「あたま」で理解され

だった。それなのに私は窓外に続く広大な畑の眺めに目 うと意気込まれる尾埜先生の熱いお気持ちの溢れるお話 てきたロランを「からだ」でよみ、きくことを実行しよ

を奪われてぼんやりとしていたようだ。フランスってこ

ん

なに広い田園地帯があるの?

バスでシャルトルに向かっ 昨 自 はシャ ル ル ド・ゴール空港に降り立ってすぐに た。 しばらく田園地帯を走っ

にも異国に来たという実感がしたのを思い返してい みを目指してひたすらまっすぐに伸びた高い塔! いか た。

聖堂の尖塔が見えて驚いた。

すっかり暗くなった天の高

たら、

突然畑の真ん中に建物群が現れ、

道路の前方に大

今日は午前中にシャ 由 ある街を見物してから、 ルトル の ヴェズレーへ ノートルダム大聖堂と古い 向かったのだ。

バ

スは田園地帯をひた走り、

私がフランスの国土の広

してくださったが、全然フランス語で話すことができず、

車で通ったりした道だ! ことがあるような気持ちを起こさせる田舎の風景が展開 黄葉の始まった木々の間の道を走って行くと、 たり、口笛を吹いたりしながら、 した。ジャン・クリストフが歩いたり、 コラ・ブルニョンが大声で歌っ おじいさんと馬 以前来た

道だ! 並みが続き、家の周囲には日本でも見る樹木や花や野菜 集落に入っていくと幾世紀も経たような古い家

のっしのっしと歩い

た

て、 い気がした。ドアを開けると木のテーブルや椅子があっ ロランの小説の一場面が繰り広げられているような

ているかのようだ。バスを降りて家の中をのぞいて見た

が植えられているが、人影は見えず、まるで昔のまま眠っ

錯覚を起こしそうだった。

達がワインや手作りのオードブルを沢山用意してもてな で歓迎レセプションが催されて皆で参加した。 にあるホテルに到着した。 バ スは五時過ぎに、 聖マドレー 六時からクラムシーの市庁舎 ヌ寺院に至る坂 地 道 元の人

すっかり落ち込んで帰った。言葉の大切さをひしひしと

感じた。

復元した部屋の大きな机の前に広い窓があり、 い黄色に塗り分けられて息づいている。 ロランの書斎を

見える風景がさぞ執筆に疲れたロランの目を慰めたであ

辺の散策を楽しんだ。 や生まれた家、さらにお墓までバスで回り、 + 卢 、四日は朝から聖マドレーヌ寺院を参拝した後、 午後はロランが晩年を過ごした家 夜は聖マド 周

旅行のハイライトとも言える内容の詰まった一日だった。 レーヌ寺院で詩の朗読とピアノの演奏を鑑賞した。この

前日までの曇天とうって変わった快晴に恵まれたことも

幸せだった。 ロランが生まれ故郷のクラムシーではなくヴェズレ Ī

こまでも伸びているのが望まれる。 に立つと、 ば 界から すばらしいが、 たからではないだろうか。 を終焉の地と定めたのは、 れる丘の 距離を置いている。 遠くの丘陵のなだらかな曲線がどこまでもど 頂に建つ聖堂の裏にあるテラスからの眺 丘. の中腹に位置するロランの家のテラス ここの地勢の魅力が大きかっ 「聖なる丘」「永遠の丘」と呼 町全体が小高い所にあって下 眼下から向こうの丘 めも

の上の方まで広がる畑は、

黒い土の色や緑色の濃淡や薄

の歳月、

最後の日々 ――

<u>_</u>

同じ部屋に置かれているグラ

三十二号所収、

界大戦に突き進んでいく時勢とはまるで別の世界がある。 ごしたということで今までより強い親しみを感じた。こ 彼がフランスの豊かな自然の中に生まれ育ち、 の強い感じは今回の旅の収穫である。ここには第二次世 ろうと容易に想像された。 つも見ていたのだと思うと、 このような景色をロランが 何か心の休まる思いだった。 晩年を過

は、 じていたに違いない。 制したのは音楽だったろう。 わき上がってくる、 心から悼んでいた。 ヴ 人間同士が傷つけ合い殺し合っているのを見通して、 ェズレーの地の聖なる静かさの中で、 叫び出したいほどの絶望と怒りを抑 しかもこの広い地面に続く彼方で 自分の内

「祈り」であったろうという一節を思い出した(「ユニテ」 村上光彦「ロマン・ロランの燔柴 ロランのピアノ演奏は彼の その最後

平和の貴さを身にしみて感

ロランは日々それを見守り、

ンドピアノはどんな音を立てたことだろう。この建物の

十月十日パリを立つ朝、

早起きしてまだ暗いうちに

中

中には は強い印象を刻んだ。 ホンから流れてくる少し高い音程の、 ロランの肉声の録音が聴ける部屋がある。 ロランによるべ 明 1 <u>ا</u> 一瞭なロランの ヴェ ーンのピ ヘッド 声

いら 盛り沢山のこの日の見物の中で最も目に焼き付い ń なかっ てい

揺

アノソナタが聞けたらどんなにいいだろうと思わずには

車して、 うのに、 もとは畑だが今は草の茂るに任せてあって、十月だとい さんがヴェズレーの全景が一番きれいに見える場所に停 るのは、 タンポポやヒナゲシの花も見え、 写真撮影をさせてくださった時のことだ。もと プレーヴのお墓参りからの帰途、 コスモス、ダ バスの運転手

パ

リは何と言っても十四歳からのロランを育て上げた

ない、 リア、 私達は歓声をあげてバスから降りて草原に入り、 うに美しいヴェズレー も時には散歩の足を延ばしてこの辺りを歩いたかもしれ 百日草、 や子供のころはきっと何度も通っていたに違い などと想像がどんどんふくらんでいくのだっ アキノキリンソウなどが咲き乱れていた。 の遠景をカメラに収めた。 夢のよ ロラン

また、

きっと来ようと思う。

た。

奥に残っている。 舞台を確かめたかったから。 緒に探し当てた所だ。『ピエールとリュー がためらわれるほど厳粛な雰囲気が漂っていた。 前の朝、 田さんとサン・ジェルヴェ教会を訪ねた。 に祈りを捧げている人々の姿に打たれた。 れながら燃えてい 仕事の都合で一足先に帰国される山下さんと一 た沢山のろうそくの火影が今も目 その朝もひざまずい 体を動かすの ス』の最後 実はその二日 小さく 、て一心

た。 していただいて、 場所だ。 ンや音楽史を講じていたロランを思い浮かべた。 いたアパートや、 カルチェ・ラタンも少しだけ歩き、 前日の午前中に宮本さんにモンパルナスへ案内 晩年のパリでの住居などを教えてもらっ ロランが『ジャン・クリストフ』を書 生徒だっ たロラ

口 マ ロランの足跡を訪ねて」

(スイス)

中 田 裕 子

しかった。

らバスでスイスに向けてヴェズレーを出発 のすばらしい景色が見られないのでは?」と心配しなが

十月六日

小雨が降るあいにくの天気。「レマン湖

ロマン・ロランが一九一四年から一九三八年までの二

すっかり上がり、晴々とした姿で迎えてくれているレマ 十四年間も過ごしたヴィルヌーブに十七時頃到着。 ン湖を前に見ながら、これからロマン・ロランに会いに 雨も

行くようなわくわくした気持ちでバスを降りた。

ことがある宮本さんの案内で木々に囲まれた静かな感じ 所で『ロマン・ロラン通り』の表示を発見、 会いご一緒させてもらう。 ほとりの散歩に出た。 弾む気持ちを抑えきれずさっそく、夕暮れのレマン湖 ロランの旧居に行く宮本さん達に 広い通りから少し右に入った 以前訪ねた

> 私達を迎えてくれているような気持ちがしてとてもうれ ずロマン・ロランの文字を見つけ、はるばる訪ねてきた ているが の家の前に立った。 『ヴィラ・ロマン・ロラン』の表札。 閉ざされた門の左上には、 古くはなっ 思いがけ

旧居の前のなだらか坂道を「ロマン・ロランも歩い た

道だ!」と思い、一歩一歩踏みしめながら歩いた。 七日 快晴 早朝、 ロマン・ロランと並んで写って

表札の前で永田さんが持ってこられた写真といっしょに ランの旧居に行かれる永田さんと再び旧居へ。ロランの いる同郷の片山敏彦、上田秋夫両先生の写真を持ってロ 明るい顔で登校する小学

ぱいになり、 私が見ていると思うと懐かしいような気持ちで胸がいっ は、きっとロランが見たのと同じ風景だろう。それを今、 レマン湖とその上の雲、 あたりの空気を体中いっぱい吸って深呼吸 沿岸の山々、シオン城。これら 生、教会の中で一心に賛美歌を歌っている信者の方々、

撮影。その帰り道に出あった、

をした。幸せな気持ちだ!

朝食後、 ホテルをバスで出発。皆さんともう一度ロラ

ンの旧居へ。門が開けられていたので覗いてみると、建

物へ続く緩やかにカーブした通路で男の人が庭の手入れ

ランの血縁の方ではないそうですが)誰かが生活をされをしていた。煙突から煙も。今もロランの旧邸で、(ロ

ているのだと実感した

の言葉だと思う。

自己愛、

自民族愛は自然な感情である。けれどもそれは原

バイロンを訪問。宮本さんが施設の方に頼んでくださっ次に、今は老人保養施設バイロンになっているホテル

とした応接間では、ヴィクトル・ユーゴーやロランなどて、中を見学させてもらった。レマン湖が見わたせる広々

想像すると、厳かな応接セットに歴史を感じた。著名な人々が、文化や政治などについて語ったのかなと

- モントルーの町を散策後、ロランが第一次世界大戦の怨像すると、厳かな応接セットに歴史を感じた。

時は戦争のニュースにぴりぴりした緊張感が漂っていた勃発を聞いたヴヴェの駅へ。中立国スイスであっても当

今は葡萄の絵がカラフルに描かれているこじ

んまりした列車がのんびりと走っていた。

と思うが、

ブドウ畑の散策などの後、TGVでパリへ向かい、私たモンペルランからのレマン湖の展望、世界遺産である

ちのスイスでの旅は終わった。

積極的に関わっていた。その思想の基になったのが下記たり、戦時の捕虜事務局で奉仕活動をしたりして反戦にを超えて」を書いたり「ハウプトマンへの公開状」を送っスイスに滞在していた頃のロマン・ロランは、「戦い

しなければならない感情である。各民族の利益自体がそれを始的感情であり、人間共同体愛に従属することによって進化

の協力なしにはすましえない時代がきたのである。(一九三

命じている。なぜなら、

三年、

ロマン・ロラン)

の言葉が載っていた。将来の夢は、医者になることだっ一月二十四日の新聞にパレスチナ自治区ガザの子ども

たが、攻撃後考えが変わったという。

読んで心が痛んだ。「戦闘員になりたい。占領者(イスラエル)と戦うのだ。」

この少年に、ロマン・ロランの気持ちを伝えたい。そ

いかなる民族ももはやすべての民族

口 マン ロランの足跡を訪ね に参加して て

Ш 楢

石

·ランスの世界文化遺産である《ヴェズレーの教会と

夜半、響き渡るベートーヴェンのピアノソナタに聞き入 マドレーヌ寺院の中で、それは二○○八年の十月四日の 丘》に聳え立つ、九世紀以来と云われるサント・マリー

る自分は本当に自分であろうかと信じられない心境でい

会主催の国際平和シンポでのこと。神谷郁代・京都市立

たことが忘れられない! フランスのロマン・ロラン協

聞き入っていたのでありました。それはかって第一次世 たベートーヴェンのピアノソナタ、コンチェルトなどに 芸術大教授のピアノ演奏 ―― ロランがこよなく愛してい

界大戦で反ファシズム、反戦の立場を明確にし、世界平

旅の一幕であったのです。

和を訴えていた偉大な文学者ロマン・ロランを訪ねての

ら九日の八日間の旅、 口 マン・ロラン研究会が企画された昨年の十月 ロラン生誕の地、 文学活動にいそ 二日 か

しんでいたところ、

世界の名だたる文学者、平和主義者

慨深く、また強烈な思い出となることばかりでした。こ ど貴重な足跡を訪ねることができました。それぞれに感 と語り合っていたところ、 ロランが眠っていたところな

と思ってもいるところですが、また別の機会に挑戦する れらのことを自分なりに思索をして書き置きしてみたい

ことにします。

友人達には電気工学の道、 間が生きてゆくに、 いました。ロマン・ロランにはまり込んでいた自分、人 く、文学の道の大切さを学ぶことが重要であると考えて 思うに、私は若い頃、 理にかなった選択の道を考えるとき、 誰がどの道に進もうとお構いな 経済学の道、 法律学の道など

思い出します。影響を受けたロランの文学に出てくる数々 間社会で欠かすことの出来ないなどと議論していた事を いろいろありましたが、

私は惜しまず、

文学の道こそ人

の人生の指針、 格言をそっとメモしていました。

そういう思い出があっただけに、 今回の旅はロランを

涯を通してこれほど感動的な旅、チャンスはなかったと 訪ねての熱き思い、 感動があったのです。 私にとって生

思っています。この思いをしっかりと自分の中に秘めて おきたい。 今回の旅、 思いもよらなかった遠くへの旅にご案内い

ることを最後に申し上げ筆を置きたいと思います。 ただいたり、 助言いただいたりした関係の方々に深謝す

の「生き様」を雄弁に語ります。

きることそのものが「旅」であり、旅することがその人

今回、 旅は道連れ、 ロラン文学に何らかの形で関わりある方々とご一 世は情け」という古い諺があります。

緒に旅することができたということ、これは本当に素晴

在し、 れぞれの思いが通い合い、響き合う、そんな豊かな場面 に出会うこともありました。ロランが暮らした田舎に滞 らしい経験となりました。 ロランが歩いた道を歩き、ロラン永眠の地を訪問 ただの名所巡りではなく、そ

いるようなぬくもりのある旅でした。

する……。

口 マン・ロラン 魂への旅

山 下 雅 子

人まで様々です。

しかしいまここに来ているという巡り

非常に豊富な人からほとんど読んだこともない、

という 知識が

「今回同行の参加者たちはロマン・ロランへの

合わせを大切にしていただきたい」。尾埜善司先生がシャ

このたび縁あって「ロマン・ ロランの足跡を訪ねる旅

に参加させていただきました。

| はよく「人生」にたとえられます。

まさしく生

持ちを軽くしてくださった一言、 表現は本当に素晴らしいと思いました。末席参加者の気 ルトルへの移動バスの中でおっしゃった言葉です。 ありがたかったです。

背景から常に柔和な眼差しが見守ってくれて — 90 —

ンでした。自分がここを訪れたことに人生の必然を感じシャルトル大聖堂は迫力のあるスピリチュアル・ゾー

て陶酔してしまいました。美しいとか、色が鮮やかとか、

理屈ではなく感覚で理解できるような気がしました。霊的な空間でした。ロランがなぜここを深く愛したか、そういうのを超えた、波動の豊かさを感じさせてくれる

生との出会いのお話。「揺さぶりをかけられた出会いでた言葉もとても印象に残っています。恩師、片山敏彦先、田和子先生がスイスへの移動バスの中でおっしゃっ

うのはこういう出会いに恵まれた人生のことをいうのだ学への熱い思いを感じ取ることができました。幸運といした」。この一言にいろんな思いが凝縮されていて、文

いので、師弟関係というのはとても重要なものです。と思います。最も大切なものは人から人へしか伝わらな

あったとしても)歴史ある文化遺産の中で聴く音楽。芸マグダラのマリアの伝説が残る(たとえ間違った伝承で谷郁代先生による全曲ベートーヴェンというコンサート。旅のハイライトは聖マドレーヌ大聖堂での演奏会。神

音の喜びに満ちた夢のようなひとときでした。選ばれていて、ベートーヴェン作品が大好きな私には倍き姿、本来あるべき場所での演奏。ロランの愛した曲が術は原初的にはすべて神への捧げもの。その本来あるべ

の名曲たち。古色漂うロマネスク様式の教会は、いにしな日に希望の火を灯してくれた格調高いベートーヴェンは大な大河小説作家にも絶望の日はありました。そん

と清澄さを兼ね備えていました。最も崇高な音楽は祈りえの人たちがここで捧げた祈りを再現するような重厚さ

ない場面に立ち会えたことを心から嬉しく思っています。会に列席させていただいたということ。滅多に経験でき所で、ロラン文学を讃えるイベントの一環としての音楽

には本当に感謝しています。格ではないので、声をかけてくださった宮本ヱイ子さん私は本質的には行動力が乏しく自発的に旅に出かける性

「ロバが旅に出たところで、

馬になって帰ってくるわ

と同質のものなのだと感じ入りました。

ヴ

ェズレーという世界遺産に登録されている神聖な名

しいながらも思わず笑ってしまう名言です け ·ではない」。こういう諺が西洋にはあるそうです。

厳

ンがかなえたかった理想世界の実現にはまだまだ時間

ゴージャスな旅に出かけることができましたが、

凡愚

して、

その魂への旅はこれからも続けていきたいもので

かかります。

しかし、

崇高な思想に縁を得た者の一人と

す。

新しく身についたか疑問ではありますが、 には本当に感動しました。 本文化に造詣の深い地元の方々のあたたかいおもてなし がサラブレッドになれるはずはなく……。 入れる余裕のあるお人柄、 ような思いは大切に育てていきたいと望んでいます。 少しでも近づきたいと憧れま あんなふうに遠来の客を受け 目が開かれた はたして何が Н

す。

魂に向かって旅をしなければならない」という言葉があ 中で旅することができます。「人を愛するには、 るそうです。 くても人間には想像力があるからどんな土地でも空想の 幸福なことです。しかしそのような機会を得ることがな 文学作品の舞台となった土地を訪問できるのはとても 外側の旅よりも内面の旅の大切さを語って 相手の

ロランを訪ねて

マン・

永 田 和 子

することとなった。 クラムシーなどで開かれ、わたしたち日本人有志も参加 九○年を記念した国際平和シンポジウムが、 ロマン・ロラン協会主催でヴェズレーやロラン生誕地の フランスの

二〇〇八年十月二日から五日にかけて第一次大戦終結

したフランスの作家ロマン・ロラン(一八六六-一九四 ン・クリストフ』で一九一五年度ノーベル文学賞を受賞

ブルゴーニュにある丘の町ヴェズレーは大河小説

『ジャ

わが国にも小さな争いは絶えることがありません。

ロラ

て興味深いものがあります。

一〇〇九年、

世界にはいろんな紛争が続いています。

四 晩年の七年間を過ごし、 パリ解放まではドイ -ツ軍

の監視を受けながら生きていた終焉の地である。 丘の上に建つ聖 マリー・マドレーヌ寺院はスペインの

あり、 の呼びかけで「かつて人々が目指した理想の世界を築こ サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の出発点の一つで 第二次大戦終了の翌年の一九四六年に一人の司祭

う。

平

‧和のためにヴェズレーの丘で祈ろう」とヨー

いった。 研究集会や映画祭などが組まれる中で、 その十字架は今も寺院の中に飾られている。 京都ロマン・

に四人のドイツ人が廃材で作った十字架を担って上って

中から四万人の人々がヴェズレーに集まった。

その中 . ロッ

ロラン研究所は聖マリー・マド シー ヌ寺院で詩朗読とピ

アノコンサートを開催した。

は

戦時中、

京都府警中立売署へ連行され、

六十一日

されたいとし子らへ』 ピアニスト神谷郁代がベートーヴェンのソナタ 間 ハンマークラヴィア第二楽章」、 の牢獄生活を送った土佐人・宮本正 の — 節を日仏二ケ国語で朗詠し、 ピアノ協奏曲 清の詩集 「月光」 『焼き殺 「皇帝第

一楽章」などを演奏した。

特に「皇帝」

はナチスドイツ

訪問 の占領直前に、 した時、 ロラン自身がピアノを弾いて女王を迎えた ベ ルギーのエリザベート女王が ロランを

曲である。

らえ、 とともに静まりかえった坂道をわたしたちは坂下の宿の 満天の星が大きく輝いていた。 動の中にいた。 Ų 夜九時から始まった朗読とコンサー 修道士が「もう入口を閉めます」というまで、感 閉会後も私たちは語り合い、 寺院の外に出ると、 天に近いのだという実感 ヴェズレーの夜空は 写真を取り合って交 ŀ は聴衆の心をと

流

まし、 方へ歩いていった。 夕方にはクラムシーの町の歓迎会にも出席してい なお午前中にブレーヴの墓参りをす

翌々日、 わたしたちはスイスに向 かっ た。 昭 和 年

た。

四年と別々に土佐人の上田秋夫と片山敏彦がスイス・ヴィ

ある。 ルヌーヴのヴィラ・オルガにロランを訪ねているからで ヴィルヌーヴはバイロンの詩で有名なション城に

事務所で働きながら平和活動をしてい 近く、第一 年から十六年間ヴィルヌーヴで父や妹と住まっていた。 次大戦中、 ネーヴ 国際赤十字の たロランは大正十 戦時俘虜

ジュ

老人ホームになっていて、老ヴィクトル・ユゴーが泊まっているだけで、ほとんど実在しない。ただ一部の建物がぞれ「HOTEL」「BYRON」と名前がはめこまれ上田、片山の泊まったバイロンホテルは門柱二本にそれ

た客間

は昔のまま、保存されていた。

けた。 彦が、 マルチネ等、 来たタゴール一家、 の話し相手であった胡桃の老樹は今はないが、この庭に に深く関わったのは、このオルガ荘時代である。 としたが、健在であった。ロランがその生涯で政治問題 ロマン・ロラン通り」にあるオルガ荘は持ち主が転 そして眼前にひろがるレマン湖、 上田秋夫が歩んだであろう小道をわたしは歩み続 知名人の姿を想像した。 ガンジー、ネール一家、 ロランが、片山敏 向こうのスイス ツヴァイク、 ロラン

(二○○八年十一月十七日 高知新聞「月曜随想」再録

しんだ。

の山々の尾根、

たなびく白雲、そして風、

出発の時を惜

国際シンポジウム 協賛者芳名(敬称略)

石川 椎葉隆雄 西成勝好 山崎暉夫 稲畑産業株式会社 楢一 山際春三郎 薬師神徳治郎 園部逸夫 柳父圀近 (稲畑勝雄) 中西明 西尾順子 多田淳子 奥田将人 朗 池垣 黒柳大造 村松 清原章夫 山崎文雄 勇 敏 杉田多津子 長谷川治清 永田(馬淵岳大 和 子

近藤 宮本 宮部 徳永勲保 淑 純 修 北村ひろみ 岡部素行 橋本由紀子 宮本利子 権 橋本喜代太 豊田泰雄 田中寛了 英子 山本和枝 日野二三代 浅海良則 沖本ひとみ 小川 清

近畿日本ツーリスト

ジョ・ソステヌート

四

ピアノ・ソナタ

第三二番

ハ短調

作品一一一

神谷先生コンサートプログラムにかえて

6 36 36 3

原章夫

清

三八年五月三十一日に、一五年間住んでいたスイスのヴィロマン・ロランは、第二次世界大戦勃発の前年、一九

神谷先生のピアノコンサートは、そのヴェズレーの丘ルヌーヴからフランスのヴェズレーに移住した。

の頂上にある、サント・マドレーヌ大聖堂で開催された。

ンの作品であり、その中でも格別にロランとゆかりのあ当夜のプログラムは以下のとおり、すべてベートーヴェ

る選曲であった。

、ピアノ・ソナタ 第一四番 嬰ハ短調「月光」

じた。

作品二七の二

二、ピアノ・ソナタ 第二九番 変ロ長調「ハンマー七三より第二楽章アダージョ 一、ピアノ協奏曲 第五番 変ホ長調「皇帝」 作品

クラヴィア」 作品一○六より第三楽章 アダー

ロランは、ベートーヴェンの創作期を、前期、中期、

後期の三期に分けた。

曲目の「月光」は、

初期の代表作である。

私は教会

かれときその残響の長さに驚いた。そしてその美しさにルとの音響の違いを楽しみにしていた。最初の和音が弾でピアノの演奏を聴くのは初めてであり、コンサートホー

ふと「月光」はベートーヴェンが付けたタイトルでは

耳を澄ました。音楽は、ゆっくり進む。

風ソナタ」だった。まさに今聴いているのは幻想だと感ないことを思い出す。彼が付けた本当の名前は「幻想曲

谷先生は、第二楽章をおごそかに開始された。が偶然鳴った。聴衆と一緒に鐘の音を聞き終えられた神

そして一楽章の最後の一音が消えたその時に教会の鐘

寒さである。当夜大聖堂に入って初めて知ったのだが、ところで、十月のヴェズレーの気温は冬の大阪並みの名先生は一第二導章をまこそかに開始された

そこには暖房設備がなく室温は二℃。 聴衆はみな私も含 世界のどこかで戦争や紛争が続いている。このアダージョ

外套を着たままである。 当然、 神谷先生の手が心 はまさに平和への祈りにふさわしいものであった 三曲目は、 ロランが生涯を通して最も好んだ、

配になる。

しかし、

ロランが

述べた第三楽章に入ると杞憂にすぎないことがわかった。 「あの不滅な噴出が迸り出る。」と アダージョ・ソステヌートだった。 代表曲「ハンマークラヴィア」作品一○六の第三楽章

後期の

ロランは次のように回想する。「ベートーヴェンの全

プログラム二曲目の「皇帝」はロランが 「傑作の森」

なんという、粒のそろった力強い連打であったろう。

と呼んだ中期を代表する作品である。

ピアノ協奏曲なので、 オーケストラの部分は、 ツアー

弾きになられた。 に同行されてたお弟子さんが、 連弾で伴奏のパートをお

最晩年のロランは、このヴェズレーで後期のベートー

が侵入して来て、その音を聞いたロランは、この「皇帝」 ヴェン研究を執筆していた。そのころドイツ軍の戦車隊

どろきに、 に住まった。」そして「ナポレオン軍の圧迫と大砲のと の二楽章アダージョが 「頭脳」もこの曲を聴いたのだろうと想像した。 槌で打たれたように感じた時のべ 「三日三晩、 それが歌い、心の中 ートーヴェ

この演奏を聴いている時点で、イラクやアフガンなど

年)の作品はおそらく私にはもっとも近いものであり、 作品のうち、大いなる危機の時期(一八一六~一八二二

た。 私の日々にたいしてもっとも緊密に結ばれているものだっ ミサ』と親密な関係のうちに生きてきた。」 私は五十年以上前から『作品一〇六』および『荘厳

であった。 こめて」と但し書きしているが、その言葉どおりの演 ベートーヴェンはこの楽章に「情熱的に非常な情感を

ノ・ソナタである第三二番 この曲は、ロランが亡くなる七日前の一 作品一一一である。 九四四 年

とても最後のピアノ・ソナタとは思えないほど力に溢

月二四日に友人のブイエ夫妻の前で弾いた曲である。 コンサート最後の曲は、 ベートーヴェンの最後のピア

— 96

や中期とはちがい、 れ た第 楽章が始まる。 音 音確信された音を積み重 ねて

進まれる。

うに反響させる。 その音を大聖堂の 石 の壁が受け止 め 問い に答えるよ

神谷先生は、 突風のような初期

第二楽章のアリエッタの主題が静かに深く奏でられた。 その響きが、 楽章が終わると同時に、 星空に吸い込まれた後に、 再び鐘が鳴る。 終楽章である

Journées Internationales ROMAIN ROLLAND Une oeuvre de paix



Concert Beethoven par Ikuyo Kamiya

Basilique de Vézelay Samedi 4 octobre 2008

Concert offert par l'Institut Romain-Rolland de Kyoto

幸せな時間

神 谷 郁 代

ズレーのマドレーヌ教会でリサイタルを行った。 それはとても幸せな時間だった。 昨年十月、 私はヴ ロマン・ ェ

意識したわけではないのだけれど、 が心酔していたベートーヴェンを演奏している。それを ロランがこよなく愛し終の棲家としたヴェズレーで、 神秘的な大聖堂の空 彼

間に響くピアノはどんなコンサートホールとも違う。 気は不思議な緊張感に満ちていた。 ピンと張り詰めた空

特に作品一一一のソナタのハーモニーが、こんなにも

ズレー 産になっている大聖堂を中心に、 充実し美しく感じられたのは初めての経験だった。 の町も素晴らしかった。 巡礼の道の基点で世界遺 小さな丘の上に作られ ヴェ

りは美味しいワインを生み出す。 囲 はどこまでも続く田園地帯で、 晩年を穏やかに過ごす 豊かなブドウの実 た町は中

-世の面影を残し美しい。

大変

滞在だったけど、私はすっかりこの町の虜になってしまっ

のにこれほど相応しい土地もないだろう。

わず

か数日

0

ための設備が整っているわけではない。ピアノはパ だ。大聖堂ではよくコンサートが行われているが、 しかし、こういう古い町でリサイタルをするのは ハリか その

寒くて、演奏をする私は寒さなど忘れてしまったが、 ばならなかった。暖房設備もないので凍えそうなくらい でドレスに着替えてから石畳の坂道を登って行かなけれ ら運ぶ事になった。大聖堂に楽屋などないので、 ホテル

と聴いていた皆さんは大変だったと思う。

三人そろって来てくださったのだ。 のリサイタルを知り、フランス人のご主人と息子さんの お逢いしたことだ。日本人の奥様がインターネットで私 た。 のツアーの皆さんもいらしたのでリサイタルは盛 大聖堂には町の方がたくさん集まり、さらに日本から 驚いたのは、 わざわざマルセイユから来たご家族に 私の演奏をそんなに - 況だっ

あれから何カ月もたつのに、 私の頭の中にはいつもヴェ 喜んで迎えていただいた事がうれしかった。

自分を振り返ってみる。
る。あるいは誰もいない大聖堂の厳粛な空気のなかで、の上からブドウ畑を眺めたり、巡礼の道を少し歩いてみるばかりなのだ。今度はピアノを忘れ、何も考えずに丘ズレーがある。実は、もう一度行きたいという思いが募

と思っている。
と思っている。



園 部 逸 夫

今度の旅行の目的は、

尾埜善司先生、

宮本ヱイ子さん

月の 道具屋でユーゴーの 行かなかったので、 ブリと回ってフォンテーヌブローからパリに戻った。十 たクラムシーを経て、ヴェズレーに一泊、 D'UN CRIME)(一八七八年)の古本が見つかったの 客が多い。パリとパリの近辺は何度も回ったことがある で、パン(牧神)とシュリンクス ノワイエはいかにも鄙びた街、 久しぶりにフランスを訪ねた。パリは相変わらず観光 '初めだが、気温は十度以下。私はオーヴァーを着て 田舎は初めて。 私のような物好きには有り難い。 通訳のガイドさんが心配していた。 パリから、 『ある犯罪の物語』 中世の有り様を保存して ロマン・ロランの生まれ (葦笛) · ノワイエ、シャ 通りがかりの古 を描いた古色 (HISTOIRE

> 受けしたりしているうちに、 ポスター原稿に、 ていたが、 段階では、 ンの愛したベートーヴェン)を聴くことだった。 神谷郁代女史のピアノ演奏(ハンマークラヴィア他 話とご協力により、ヴェズレーの有名なセント・マリー 始め日仏のロマン・ロラン研究所関係者の皆さんのお世 マドレーヌ(マグダラ)聖堂で、宮本正清の詩の朗読や 偶然、 時間の都合もあり、ヴェズレー行きを逡巡し 毛筆で女史の名前を書くことをお引き 京都のロラン研究所の座敷で、 間際になって急遽出かける 計画 演奏の ロラ

く後陣の窓の薄明かりを背景にして、中央の部分が一段さて、その夕べ、聖堂の身廊が客席となり、内陣と遠

気になった。

蒼然の小さな銅版画と一緒に土産にした。

雅子さんに、関係者の Madame Claudine Midon のお れた。 皆様のご厚意に改めてお礼を申し上げる。 招きで夫人のお宅に急遽移って一晩泊って頂くことにな 約が取れなくて、宮本ヱイ子さん、西尾順子さん、山下 なかったのと、次の時間も迫っていたので失礼した。私 囲気は如何にも中世の教会らしくてよかった。 だった。客席は一杯の聴衆。しかし寒い上に暗闇。 高くなっていて、そこにヤマハのグランドピアノが置か の渡仏は急なことだったので、ヴェズレーのホテルの予 をして頂いた。その後招宴があったが、私は予定してい チをした。駐仏日本大使館の外交官小林龍一郎氏に通訳 る歓迎レセプションがあり、指名されて日本語でスピー 演奏も素晴らしかった。 の照明が急拵えで、 お蔭でその晩、 最初予定された前室に比べ舞台としてはぴったり 私はホテルに泊まることができた。 出演者も演奏家も苦労されたが、 催しの前に、市庁舎で市長によ 朗読も、 舞台 雰

> 令夫人にパリの大使公邸で手厚いおもてなしを受けた。 は穫り入れの直後だった。ミレーの描いた田舎の畑を思っ 帰路、 神谷女史とともに、 旧知の飯村豊駐仏大使と

た。

記して謝意を表する。

(元最高裁判事)



ホテルの二階の窓から見えた景色。シャブリのブドウ畑

ロランが晩年を過ごしたヴェズレー丘から見た景色、

フランスは山が近くにないから、

田舎の遠望が美しかっ

村 一 彦

奥

全体を扱った文字通り「知の巨人」にふさわしい存在で 年八十九歳で、お亡くなりになりました。新聞では加藤 周一さんを評論家と紹介していますが、加藤さんの仕事 は「評論家」という肩書きの枠には収まらないと思いま は「評論家」という肩書きの枠には収まらないと思いま は「評論家」という肩書きの枠には収まらないと思いま は「評論家」という肩書きの枠には収まらないと思いま の文化論、『追いつき過程の構造について』の社会経済 の文化論、『追いつき過程の構造について』の社会経済 の文化論、『消えた版木』の劇作など、ひとつの文明 命』の小説、『消えた版木』の劇作など、ひとつの文明

まとまったものとして「生きているロマン・ロラン」加藤さんとロランもしくはロラン研究所のつながりは、した。

義者の国際組織である第二インターナショナルは、

— 九

一二年バーゼル宣言で、

万国の社会主義者はきたるべき

一九八九年、ユニテ十七号)があります。ンの反戦思想と現代」(ロマン・ロラン研究所での講演、平和思想」(一九六七年「月刊みすず」)、「ロマン・ロラ(一九五一年、女性改造「改造社」)、「ロマン・ロランの

を知ることによりその困難さが分かるでしょう。社会主あるいは反戦から好戦に転じる中で、反戦を貫いた稀有の人であるということです。第一次世界大戦当時においの人であるということです。第一次世界大戦当時においの人であるということです。第一次世界大戦当時においの人であるということです。第一次世界大戦当時においることによりその困難さが分かるでしょう。社会主知ることによりその困難さが分かるでしょう。社会主知ることによりその困難さが分かるでしょう。社会主

にもかかわらず、一九一四年に戦争が始まると「祖国坊帝国主義戦争に反対する決議を満場一致で採択していた

政

府と世論が

聖戦」

を叫んでいる渦中にあって、

そ

にも を受け、 ちに崩壊しました。 ツの社会主義者カウツキーに裏切られたレーニンは衝撃 の名でそれぞれが所属する国の戦争を擁護し、 か かわらず、 スイスのベルンに亡命します。 特に、 九 四年に戦争が始まると「祖国 国際的リー ダーであったドイ ローザ・ルクセ ただ 防

イギリスのバートランド・ラッセルは戦争がはじまるとン・ジョレースは戦争が始まると同時に暗殺されました。ンブルグは自殺を試みます。フランスの社会主義者ジャ

貫いたトーマス・マンはドイツ文明の高さを誇り、フラ懲役刑を受けます。一方、第二次世界大戦では反ナチを労働党に入党し、徴兵反対協会などの反戦運動で罰金や

ロランは、戦争がはじまるとスイスに亡命します。ンスとの戦いを肯定しました。

ス

を書きます。

戦争は、

金融資本を中心とする資本による

義の名において、その帝国主義的忠節を誓っている。……イスのヴヴェーに到着した翌日の日記に「ドイツ社会主

フランスの社会主義の名において、

に進軍すると宣言している」

(『戦時の日記』一九一四年

彼らはドイツ人反撃

八月一

日

と書きました。

とになります。我が国でも日露戦争には徹底した非戦をれないと思ってもそれを態度に表すことは命を懸けることはまずありません。また、戦争が誤っているかもしと思います。戦争が誤っていると判断すること自体難しいことだの戦争が間違っていると判断すること自体難しいことだ

の歌』に書かれていますが、その意見を公表することは加藤さんが、反戦の姿勢を持っていたことは自伝『羊

貫いた内村鑑三でさえ、

日清戦争は熱烈に支持しました。

ます。また、『資本主義の最高の段階としての帝国主義』ゲル哲学の本格的勉強をはじめ『哲学ノート』が残されスイスに亡命したレーニンは、ベルンの図書館でへー

気に魅せられていたのではないでしょうか

相当はばかられたようです。

不可避なものと位置づけます。したがって資本主義を廃領であると見抜きます。レーニンは、戦争は資本主義に世界分割であり、植民地と市場の獲得のための軍事的占

する方向をとることは戦争をやめる方向に繋がります。不可避なものと位置づけます。したがって資本主義を廃

— 103 —

その経験からもロランの勇

理性や宗教を汚さないようにすることこそ義務なのです。 五年七月二十八日付け手紙)と書き送っています。 この本質的な義務に、ドイツとフランスのほとんどすべ 5 紙において「戦いが外で荒れ狂っているとき、うち捨て 理 ての思想家たちは背いています」(『戦時の日記』一九一 いようにし、 れた炉と、 一性を凌駕するところに起こると考え、 同じ時期にスイスに亡命したロランは、 今日そうであるように、恥ずべきやり方で、 精神の祭壇を見守り、それを風にさらさな 知人にあてた手 戦争は狂気が この

> うか。 中心的活動を担われました。 びかけ人として日本国憲法の平和主義を擁護する運動の ているのではないでしょうか。 殊な原因を取り除く努力と戦争の結果は常に非 と断言します。 から学んだ反戦平和主義が流れているのではないでしょ あるという普遍的な真理を学ぶことが必要であると訴え その思想を受け継ぐことは、 加藤さんは、 その思想の根底にはロラン 戦争をなくすには、 晩年、 加藤さんがもっとも 「九条の会」 人間的 その特 の呼

う。 加藤さんは、 医者ですから、 病気の治療はまず診断と

えた宗教

同手紙)

の存在を信じるところに生じたと言えるでしょ (キリスト教)による「人間文明の共同体」 ようにロランの反戦思想は、

人間がもつ理性と祖国を超

希望したことだと私は信じます。

たことは明らかである」(「生きているロマン・ロラン」) 探すには、 いう基本姿勢をもっていますので、 その一方、 後から見れば、 まずその原因を探るという姿勢を持ってい 卜 ロイ戦争も宗教戦争も、 戦争はやむをえない手段ではなかっ 戦争をなくす方法 () かなる戦

す。

ロマン	ン・ロラン研究所の活動		一九七七			
			2 • 10	中国文学とロマン・ロラン	相浦	杲
一九七一			一九八九			
5 • 15	ロマン・ロランと日本の青年(映画	(映画『ロマン・ロ	4 • 20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤	周一
	ラン』上映)	宮本 正清	6 • 9	ロマン・ロラン全集と私	小尾	俊人
11 • 27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	9 • 29	ロマン・ロランの革命劇から ―― フニ	フランス革命二	命二
一九七二				○○周年の記念に	中川	久定
6 • 24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥	11 • 17	ロマン・ロランとの出会いから		
一九七三				尾埜 善司・	今江	祥 智
5 • 26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心	の教会を中心	一九九〇			
	にして	高井 博子	1 • 27	ロマン・ロランに負うもの ―― 平和-	平和と音楽	
12 • 18	私の人間観	末川博			新村	猛
一九七四			6 • 2	ロマン・ロランとガンディー	森本	達雄
6 • 29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	9 • 26	『魅せられたる魂』と私	樋 口	茂子
12 • 5	ロマン・ロラン没後三十周年記念 ―	- 講演と音楽	10 • 26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	・ロラン	
	の夕べ	佐々木斐夫			小尾	俊人
	演奏	演奏:玉城 嘉子	11 • 30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治	英治
一九七六			一九九一			
7 • 11	ロマン・ロランとゲーテ	南大路振一	3 • 1	ロマン・ロランと私	松居	直
	ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	6 • 4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよひ	よひ

28 番	第21番、3	ベートーヴェン・ピアノソナタ		祥 智	善司•今江	尾埜 善司	
暁生	岡田	レクチャーコンサート	11 • 16			いま、ロマン・ロランを語る	1 • 28
承姫	鄭	ロマン・ロランとの出会いから	6 • 14				一九九四
			一九九六	重本恵津子	重本	『魅せられたる魂』を語る(後)	10 • 15
暁生	岡田			重本恵津子	重本書	『魅せられたる魂』を語る(前)	6 • 23
	ノスの周辺	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺	11 • 10	哲雄	山折	ガンディーとロマン・ロラン	5 • 24
美智	片岡	私の歩んだフランス文学の道	6 • 2	和男	石田	ロマン・ロランの演劇的世界	1 • 29
俊人	小尾	ロマン・ロランと日本人たち	1 • 27	佐々木斐夫	佐々	自伝的諸作品について	1 • 29
			一九九五				一九九三
正	督今井	映画上映「また逢う日まで」(監督		俊人	小尾	不思議な静けさ ―― 宮本正清の世界	
祥 智	今江	で		々木斐夫	佐々	静かにやさしき顔	
う日ま	」「また逢	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日	12 • 24	忍	· 山田	ピアノ演奏:	
圭太	奏:小坂	ピアノ演奏:				宮本正清 没後十年記念追悼会	11 • 27
		――ベートーヴェン、デュカ他作品		俊輔	鶴見	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	10 • 30
暁生	岡田	ロマン・ロランとドイツ音楽	12 • 3	幸策	戸口	ロマン・ロランとイタリア	9 • 25
節人	岡田	自然科学とゲーテ		慶治	岩田	〈大洋感情〉と宗教の発端	6 • 26
健二	河野	ロランとフランス革命					一九九二
ャトレ	B・デュシャ	あいだ		節人	岡田	初めにロマン・ロランあり	11 • 29
行動の	その思索と行動	神秘と政治 ロマン・ロラン、こ	10 • 14	兵藤正之助	兵藤	ロマン・ロランの思想の二面性	10 • 25
雄	中野	ロマン・ロランと音楽	9 • 9	光彦	村上	ロマン・ロランとデュアメル	9 • 27

	B	村上 光彦	ロマン・ロランと大佛次郎	11 25
ディディエ・シッシュ	生	クチャー:岡田 暁生	レ	
3 ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー	12 • 21	ピアノ演奏:小坂 圭太	ピ	
"神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く』		 - -	ロマン・ロラン記念コンサート	10 • 30
ンサート 神谷 郁代	旦	柳父 圀近		
財団法人ロマン・ロラン研究所設立三十年記念コ	6 • 23	術からの解放	ロマン・ロランと政治的魔術からの	9 • 25
尾埜 善司	大	柏倉 康夫	ロマン・ロランと種蒔く人	6 • 8
シンポジウム 今江 祥智				一九九八
ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉 青木やよひ	2 • 23	ェロ演奏:小川剛一郎	チ	
	11001	 - -	ロマン・ロラン記念コンサート	
佐々木斐夫	仔	ピアノ演奏:北住 淳	ピ	
ロマン・ロラン没後五十五年と日本	10 • 13	ベ	ピアノとチェロのための夕べ	10 • 4
	11000	代 福田 眞人	ロマン・ロランと結核の時代	9 • 19
ロマン・ロランとインドの精神 森本 達雄	12 • 1	岩淵龍太郎	わが青春と一生	6
お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」	犬	區 建英	魯迅	
"園田高弘ベートーヴェンを弾く』	ے	愛」ロマン・ロラント	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと	1 17
ト 園田 高弘				一九九七
日本ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサー	10 • 8	本山 美彦	ラン	
ローランと音楽 岡田 暁生	6 • 11	学から見たロマン・ロ	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロ	11 • 18
	子 一九九九	ピアノ演奏:北住 淳	ť	

朗読とおはなしの会	5・29	二〇〇四	峯村 泰光 10・29 交差する肖像	11・22 ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える	解説 西成 勝好	ジル・ド・ジェンヌ 6・25 生々発展する魂	プリーモ・レーヴィを語る	5・31 戦争と平和、科学を考える ヴァイ	ピアノ演奏:沖本ひとみ 梅原ひまり 神谷郁代	尾埜 善司 6・12 ロマン・ロラン没後60年	5・10 ロマン・ロランの作品による音楽とレコード 加古祐二郎と瀧川事件	郁子・イワノヴィッチ 1・29 現代の法とヒューマニズム	演奏:ピエール・イワノヴィッチ 二〇〇五	4・19 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート 価したか	二〇〇三 中国の知識人はロマン	11・11 ロマン・ロランの後継者たち 蜷川 譲 9・11 抗日中国における中仏文	ピアノ伴奏:郁子・イワノヴィッチ	イワノヴィッチ	イワノヴィッチ イワノヴィッチ フ・16 ロマン・ロラン	価したか 第 9・11 抗日中国にお
通訳 原口 研治	J・F・アンス	ロマン・ロランとクローデル	する肖像	青木やよひ	ゲーテとベートーヴェンそしてロマン・ロラン	発展する魂	ピアノ演奏:神谷 郁代	ヴァイオリン演奏:梅原ひまり	は原ひまり 神谷郁代デュオ	ロマン・ロラン没後60年記念コンサート	活	この法とヒューマニズム		内田	国の知識	抗日中国における中仏文化交流	郁子・イワノヴィッチ	・ イ ワ ワ	イワノヴィッイト	ンをど

朗読:下郡 由ほか		狩野 直禎		
ピアノ演奏:岩坂富美子		京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合	京大シノ	
2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』	2	中国研究を通しての日仏交流	中国研究を	10 • 13
二〇〇九年		村田まち子・宮本ヱイ子		
ピアノ演奏:神谷 郁代		そして『母への手紙』	そして『	
10・4 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン	10	第一次世界大戦とロマン・ロラン	第一次世	
フランソワ・ラベット			朗読の会	7 • 21
「わらい」朗読 尾埜 善司		尾埜 善司 ほか 会員		
宮本正清の詩「焼き殺されたいとし子らへ」		「ピエールとリュース」朗読	「ピエール	
・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム	10	会 歌:下郡 由	歌と朗読の会	2 • 3
ロマン・ロランと日本人たち 尾埜 善司	10	豊 剛秋・増永雄記		
・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演	9	大谷 祥子		
榎本 泰子		ヴァイオリンによる新春コンサート	琴笙ヴ	
6・28 中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷		通訳 シッシュ由紀子		
会員たち		シッシュ・ディディエ		
親子で読む・聴く『ジャン・クリストフ物語』		日本におけるロマン・ロラン受容史	日本におけ	1 • 20
3・8 朗読の会	3			1100七
O,	- 二〇〇八	山口 俊章		
今藤政太郎		戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン	戦間期ヨー	11 • 24
11・6 『ピエールとリュース』を演出して	11			二〇〇六

に文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛 のであります。 光に照らされ、 にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の 他の作家、音楽家、画家、彫刻家、 をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、 の一人であります。武者小路実篤、 しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、 強く深い、精神的、 マン・ロラン(一八六六~一九四四) 人格的感化陶治を受けた者は枚挙にいとまない 道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家 さらに科学者、実業各方面 大仏次郎、 志賀直哉等の白樺派の人々 は 存在価値は、 小島政二郎その 日本人にもっと たん

体の偉大な共有財産として、 われの文明を堕落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨー ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、 的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、 うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会 フ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、 べきだと言っております。 音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦 に世界的、 にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、 人類の進歩と平和のために、 『民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全 ッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、 人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリスト ロランは、インドの哲学、宗教を研 現存のそれに勝る大文明を創造す いかに必要であるかを説き、 われ 真

> 喜ぶべきことと信ずるのであります。 て、 両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。 邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか 究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高 に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために このような思想家、 半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層 芸術家、偉大な人間が、 わが日本におい

九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

●講演会 〕読書会・研究会

゚ロマン・ロラン研究所賛助会員について)機関誌『ユニテ』発行

ーロマン・ロランの著作に感動、

彼 の周辺の芸術家たちに興味

)あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

)特典=①機関誌「ユニテ」の配布。 ております。 ずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたし ②賛助会員の参考に資

|会員=一般賛助会員は年会費一口五千円から。 員は年会費十口以上。 する情報、資料等の提供。 ③公開講座無料 特別賛助 会

中田 森内 稲畑産業株 福井 早川工務店 シッシュ・D・由紀子 青木やよひ !冨美子 瑞穂 光彦 裕子 幸子 真杉 次郎 友栄 岳大 郁代 式会社 (早川 日野 福田 中谷 伊砂 能田 永易 丸本 井原 有馬通志子 森内依理子 木下 村田まち子 加藤富美子 由紀子 (稲畑 利彦 郁子 義明 勝雄) 峯村 大川 大石 西成 中西 森本 村山 黒柳 加藤 乾 井原 池垣 古家 五島 安藤 西村七兵衛 長谷川治清 起示子 香代子 明朗 達雄 知子 泰光 昌明 眞弓 和雄 大造 勇 *本郷美智子 安倍 野村 西尾 狩野 宮部 岩坪嘉能子 今江 宮本ヱイ子 小牧 長谷川友行 田 祥智 忠温 道子 久時 道子 庄吾

> 所司 大谷 三友居(山本 岡島コレット 史朗 馬木 志賀 岡部 田谷 田嶋佳功子 谷口けいこ 勝 尾埜 里美 素行 善司 多田 千歳 上西 大谷佳世子 大谷 妙子 美穂 佐久間啓子 祥子 梅原 鈴木 佐々木斐夫 竹本 田間 上原 浩典 ふさ 徳治

山口 ヲストベリ 稔子 山本 ヴァンチュール・ミシェル 和枝 山本 八木美佐子 信子 山下 安木由美子

植松

和田

義之

今江祥智氏から次の寄贈図書がありました。 Romain Rolland Le voyage Intérieur Albin Michel Bernard Duchatelet Albin Michel Romain Rolland tel qu'en lui-même

1959

Haruo Takahashi Stefan Zweig Marcel Martinet Univ Chuō 1994 Romain Rolland Biographie Corespondance Jean Richard Bloch= Belfond

新役員名簿

小尾俊人(元みすず書房編集長)

理事

森本達雄(名城大学名誉教授)

宮本ヱイ子(仏学史研究)

西成勝好 永田和子(片山敏彦研究家) 野村庄吾 (元奈良女子大学教授) (大阪市立大学大学院特任教授)

*稲畑勝雄 (稲畑産業会長)

*清原章夫(グンゼ研究員)

*シッシュ・ディディエ(甲南大学准教授) *長谷川治清(同志社大学ビジネススクール教授)

監事

西村七兵衛

(法蔵館書店会長)

*池垣

勇(元稲畑産業専務

評議員

能田由紀子 (国際電気通信基礎技術研究所研究員)

加藤澄子

和田義之(弁護士)

中西明朗(元会社員)

*奥村一彦(弁護士)

*守田省吾(みすず書房

*シッシュ・由紀子 (通訳・翻訳業) 編集長

(二〇〇八年四月改選

*新任

読書会報告

テクストは『コラ・ブルニョン』

例会 第四土曜日、午後二時 – 四時

場所 ロマン・ロラン研究所

二〇〇八年四月二十六日、五月二十四日、

七月二十六日、

九月二十七日、十月二十五日、十一月二十二日

友の会から数えると、四五○回を終了しました。 以上八回、二六八回から二七五回。日本ロマン・ロランの 二〇〇九年一月二十四日、三月二十八日

— 112 —

ロラン協会」(Association Romain Rolland)は、二〇 第一次世界大戦終結を記念して、フランスの「ロマン・

びかけがありました。 三十五名の参加をもって応えました。主題は「平和」と 〇八年十月、 . 国際年祭を企画し、日本にも熱い参加の呼 わが研究所もこれに協力するため

連帯」です。具体的なシンポジウムなどの内容は、

参

は、 仕事がこの機会に、現代の世界の状況と対比して、切実 加の皆さまの本文でご承知いただければと存じます。 私どもの心の中に入ってきたということを、大きな このような催しが行われ、 ロマン・ロランの生涯と 私

喜びといたしております。

世界は混沌、

カオスの只なかに在ります。

第二次世界

広島、 せんが、 聞の一つの投書に、 上の死者、 大戦の当事国はわが日本でした。徴兵の兵士二三〇万人、 長崎の原爆、 自殺している人が、兵士のように思えて仕方あ さらに外国の市民に与えた厖大な犠牲者。 現在「日本は外国と戦争をしていま 東京などの空襲による市民八十万以 新

りません」(東京新聞・二・二八)とありました。

た『ベートーヴェンの生涯』の一冊を、そして『ジャン・ 若いロランが、ペギーの「カイエ」の一冊として書い

クリストフ』の全訳を、まず中国に紹介・翻訳した傅雷

(フー・レイ)。ロランの精神で、長男の傅聡(フー・ツォ 中国の、 わゆる

という悲劇。それは榎本先生のお話でわれわれの生きた 「文化大革命」のなかで、夫婦二人で自殺を強いられる ン)を偉大な音楽家に育てた彼が、

現代という時代、それとともに、人間という存在 な、「善も拡大し、悪も拡大する」現実を痛切に伝えて 一の複雑

「ロマン・ロランのような、イデオロギーだけのほとん おります。それはまた、傅雷の人間の別の)側面、 例えば

たちは誤つ「動物」です。 Slip of the penとして看過できるものでしょうか。 にも見られるでしょう。これは単なる「筆のすべり」 ど抽象的な漫画」(一九六二)(本文十二頁)という表現 私

み、 記念講演「ロマン・ロランと日本人たち」に加えて、国 「ロマン・ロランを〈あたま〉 きく」は「前理事長、 尾埜先生への感謝の会」での 〈からだ〉

でなく

ご感想などを補足したものです。長年のご貢献にあらた 際平和シンポジウムでの宮本正清の詩を朗読くださった

めて感謝する次第でございます。

村上先生の連載は毎回ながら、

時期における、彼の意識、 ロランの生涯の最後の

彼の「理性的人間」(「内面の

旅路」旅へのいざない)の健全さの証明であります。 御寄稿いただいた諸先生に、心から御礼申し上げます。

(小尾記)

ります。

みごとな号になりました。

編集者一同、

心から喜んでお

小尾 編集部 俊人

中西

西村七兵衛

野村

庄吾 明朗

宮本ヱイ子

印 発行者 発行日 刷 所 財 株 ○一○五○-九-五九郵便振替振込口座番号 郵便番号 電話・FAX 京都市左京区銀閣寺前町三二 (○七五) 二〇〇九年四月十日 北 口 理事長 マン・ 斗 七七一 六〇六一八四〇七 プ 九-五九九九六 西 成 勝 好ロラン研究所 IJ 社

URL http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/ E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp No 36 Avril 2009

UNITÉ

Numéro Spécial Journées internationales Romain Rolland 2008

Sommaire

Fu Lei traducteur et introducteur de Romain Rolland en Chine	Yasuko Enomoto
Lire et écouter Romain Rolland non « par l'esprit » mais « par le corps	» Zenji Ono
Au seuil de la dernière porte: reflexions (suite)	Mitsuhiko Murakami
Quelques mots du nouveau Président de L'Institut Romain Rolland: L'Institut Romain Rolland et moi-même	Katsuyoshi Nishinari
Rapports sur les Journées internationales Romain Rolland 2008:	Eiko Miyamoto etc.
Moments de plénitude	Ikuyo Kamiya
Impressions de voyage à Vézelay	Itsuo Sonobe
À la mémoire de Shûichi Katô	Kazuhiko Okumura
Compte rendu des activité de l'Institut Romain Rolland	
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2008 des membres et donateurs	
Postface	Toshito Obi

Publication: Institut Romain Rolland 32 Ginkakuji maé, Sakyo-ku, Kyoto ₹606-8407